

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第51集

あと くち
跡ノ口遺跡

いっ しき なが はた
一色長畑遺跡

ふな ばし みや うら
船橋宮裏遺跡

1994

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県稲沢市は名古屋市北西に位置し、そのベッドタウンとして発展しつつある都市です。しかし新興都市とはいっても、かつて古代には尾張国府が置かれ、また国分寺・国分尼寺が建立された歴史があります。そこかしこに歴史の跡が刻み込まれている都市でもあるのです。

このたび、県道の建設に伴い、稲沢祖父江線にかかる船橋宮裏遺跡、馬飼井堀線にかかる跡ノ口・一色長畑遺跡の発掘調査を、愛知県からの委託事業として財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施いたしました。その結果、船橋宮裏遺跡からは中世の火葬墓跡、跡ノ口遺跡では弥生時代中期末から後期の遺物や古代から中世にかけての集落跡の一部、一色長畑遺跡からは弥生時代中期の集落跡の一部が発見されるという成果を得ることができました。

調査にあたり、地元の方々や関係機関からは多大なる御協力を賜りました。深く御礼申し上げます。

平成6年3月

財団法人愛知県埋蔵文化財センター
理事長 高木鐘三

あと くち
跡ノ口遺跡

いっしきながはた
一色長畑遺跡

例言

1. 本書は愛知県稲沢市一色森山町に所在する跡ノ口遺跡と同一色長畑町に所在する一色長畑遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、県道尾平町線建設に伴う事前調査として、愛知県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターが、平成3年4月から7月まで行った。調査面積は跡ノ口遺跡：2,560㎡、一色長畑遺跡：880㎡である。
3. 調査は石黒立人（調査研究員）・服部虎之（同）が担当した。
4. 調査にあたっては、次の各機関の御指導・御協力を得た。
愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県土木部、愛知県企業庁尾張水道事務所、稲沢市教育委員会。
5. 本書の執筆は石黒・服部の他宮腰健司（調査研究員）が分担した。編集は石黒が行い、執筆者は文末に示した。
6. 本書の作成に際しては、伊藤慶子（調査研究補助員）、国立智美（調査研究補助員）の御協力を得た。
7. 本書の作成にあたり、次の機関・諸氏の御教示・御協力があつた。
(順不同・敬称略)
北条敏示、日野幸治。
8. 調査区の座標および諸記号等は当センター規定による。
9. 出土遺物および調査記録は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目次

I. 調査の概要	1	
A. 調査の経緯と経過		
(1) 跡ノ口遺跡・・・1	(2) 一色長畑遺跡・・・1	
B. 遺跡の位置と環境		
(1) 地理的環境・・・2	(2) 歴史的環境・・・3	
II. 調査の成果	5	
A. 基本層序 5		
B. 跡ノ口遺跡		
(1) 遺構・・・6	(2) 遺物・・・7	(3) 自然科学的分析・・・11
C. 一色長畑遺跡		
(1) 遺構・・・12	(2) 遺物・・・14	(3) 自然科学的分析・・・18
III. まとめ	23	
A. 弥生時代石器の終末をめぐって・・・23		
B. 調査成果のまとめ		
(1) 跡ノ口遺跡・・・24	(2) 一色長畑遺跡・・・24	

神居目次

第1図 尾平野の地形分類	第14図 一色長畑遺跡91A区の遺跡基盤群
第2図 遺跡分布図	第15図 S B01に試料採取地点
第3図 基本層序模式図	第16図 S B01におけるイネの検出状況
跡ノ口遺跡	第17図 S B01におけるヌカキ属の検出状況
第4図 出土遺物(1)	第18図 S B01におけるヨシ属の検出状況
第5図 出土遺物(2)	
第6図 出土遺物(3)	
第7図 出土遺物(4)	
第8図 出土遺物(5)	
第9図 跡ノ口遺跡91A区の遺跡基盤群一色長畑遺跡	
一色長畑遺跡	
第10図 S B04出土遺物分布図	
第11図 出土遺物(6)	
第12図 出土遺物(7)	
第13図 出土遺物(8)	

表目次

第1表 一色長畑遺跡91A区S B01の植物体層分析
第2表 一色長畑遺跡91A区S B01における主な分類群の植物体量の推定値

図目次

跡ノ口遺跡
図版1 91A区プラン図・土層セクション図
図版2 91B区プラン図・土層セクション図
図版3 91C区プラン図・土層セクション図
図版4 91A区透視写真
図版5 91A区近景および遺構写真
図版6 91B区・91C区近景写真
図版7 91C区近景および遺構写真
図版8 弥生土器写真
図版9 須恵器・中世陶器写真
一色長畑遺跡
図版10 一色長畑プラン図・セクション図
図版11 91A区全景写真
図版12 91A区近景および遺構写真
図版13 S B04遺物出土状態写真
図版14 弥生土器写真
図版15 S B04磨製石斧出土状態および石器写真

I 調査の概要

A. 調査の経緯と経過

調査は県道馬飼・井堀線建設に伴う事前調査として、平成3年4月から7月にかけて実施した。

(1) 跡ノ口遺跡

調査区はA・B・Cの3区に分かれ、いずれも鳥畑と水田にまたがる部分である。

このうちC区は現況が畑であったが、下部で畑造成以前の現代の水田の存在を確認し、それ以前の遺構・包含層は存在していなかった。

遺構・遺物が検出できたA・B両区では、古代から中世にかけての土坑や溝が検出された。しかし、両調査区を通して中央部には水道管が埋設され、また農業用水管の埋設や北半分が水田造成により削平されていたために、遺構・遺物の遺存箇所は部分的にとどまった。ただ、古代以降の遺構・包含層の基盤層からは弥生時代中期末～後期初頭の遺物が出土し、一部には炭化物層の広がりも認められたことから、当該期の遺構・包含層の存在が考えられた。この点については、今回の調査で十分な把握ができなかったけれども、今後の周辺地区での調査に際しては十分に注意を払う必要がある。

ところで、5月下旬以後、周辺の水田に水が入ったことや、地下水位の上昇もあって調査区では絶えず湧水があり、高位面の遺構は別にして、遺構の低面や低位面の遺構は水漬状態になった。とくに下部の弥生時代遺物検出層については、地下水位面に位置しているために十分な調査がおこなえなかった。

(2) 一色長畑遺跡

調査区はA・Bの2地区に分かれ、どちらも鳥畑と水田にまたがる。

A区では、水田部分は削平によって破壊されていたが、鳥畑部分では弥生時代中期末の遺構を検出した。だが、遺構はいずれもきわめて浅く、包含層も遺構内部に限られていたことから、鳥畑といえどもかなり削平の進んでいることが確認できた。

B区で畑造成以前の現代水田の検出にとどまり、それ以前の遺構・遺物の検出はなかった。

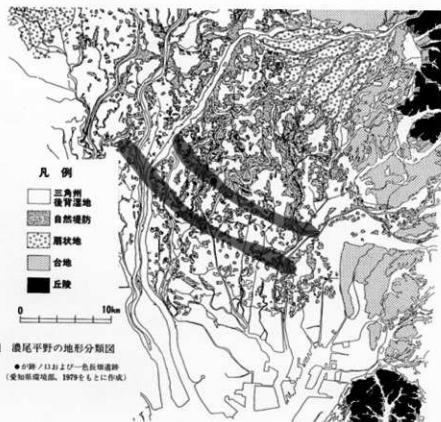
本遺跡においても跡ノ口遺跡と同様に地下水の湧出に悩まされた。 (石黒立人)

B. 遺跡の位置と環境

(1) 地理的環境

濃尾平野は木曾川により埋積された沖積平野であり、上流域より扇状地帯・氾濫原地帯・三角州地帯という地形に分類できる。跡ノ口遺跡および一色長畑遺跡の立地する稲沢市は、濃尾平野のほぼ中央部の氾濫原地帯にあり、かつての木曾川の支流である三宅川と日光川の間位置する。たび重なる河川の氾濫の歴史は肥沃な大地を産み出し、特に稲沢市周辺の自然堤防地帯は全国でも有数の植木の産地として名をはせている。

ところで、氾濫原地帯に属する跡ノ口遺跡・一色長畑遺跡周辺にはもう一つの地形的な特徴があることも述べておく必要がある。それは、森(1992)や服部(1993)が触れている縄文海進後の海退期に形成された浜堤の問題である。三宅川・日光川などの河川により形成された自然堤防の高まりと直交(ないしは斜交)する基盤砂層の高まりは、縄文海進高潮期以降の打線安定期に形成された海浜性の浜堤(第1図参照)であろうとするもので、森(1992)の基盤砂層の粒度分析結果もこれを証明している。この浜堤の存在が河川の流下を妨げ、蛇行・氾濫を助長したことは容易に想像ができる。河川の蛇行・氾濫の歴史は人々を苦しめたのと同時に自然堤防と後背湿地、居住域と水田域という安定した生活の場を拡大していったことも事実であろう。(服部俊之)



(2) 歴史的環境

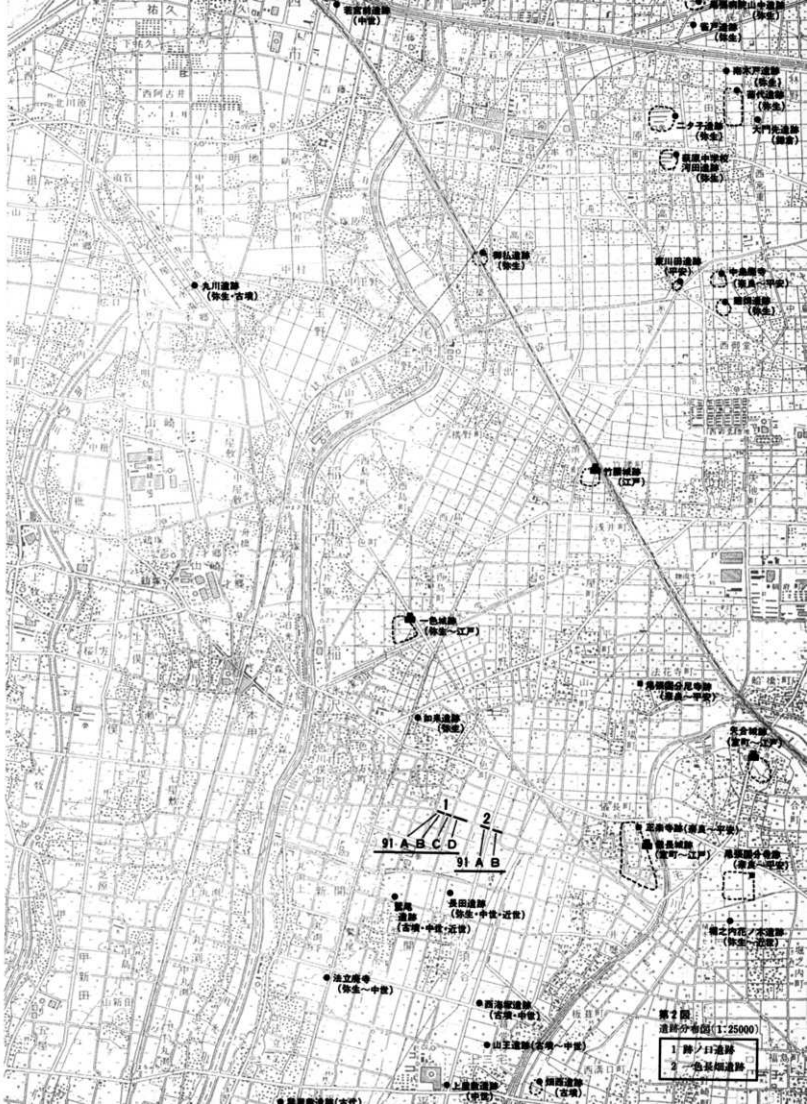
跡ノ口遺跡や一色長畑遺跡は、現在の日光川と三宅川のちょうど中間に位置している。近在には弥生時代以降の遺跡がいくつか知られるが、調査が行われている遺跡は少なく、相互の関係に触れるまでには至らない。実際に、尾張平野における遺跡のありかたについては、神領平野に位置していることから必然的に生じる〈埋積〉という条件、そしてその〈埋積〉条件の時期的な変化という2点が明らかにならないと、適正な判断が困難である。これらの点は自然環境の復元を先行させる必要のあることを強く求めており、それなくして歴史的環境に接近することは難しいだろう。

上記のような制約条件はあるが、ここで簡単に、弥生時代と古代・中世について触れておこう。

日光川流域における遺跡の展開で注目されるのが一宮市萩原地区の遺跡群である。山中遺跡を始めとして弥生時代前期と弥生時代後半以降に遺跡が濃密になる。これら弥生時代以降の遺跡密度の上昇は低湿地開発の成功を背景にしていると思われるが、それは跡ノ口・一色長畑遺跡の廃絶後である点が注意される。この点は、日光川上流部と中流部の環境条件に大きな差があったのか、単に時期的な差であるのか、明らかにしなければならないが、いずれにしても中期末には中期ごろの空白期を経て低湿地帯で広範に遺物の出土が認められ、おそらく新たな遺跡の展開があったものと思われる。その段階を経て、後期ごろ以降の時期に濃密な遺跡展開が可能になったのであろう。跡ノ口遺跡で受口状縁帯が高頻度で出土したことの意味はこうした低湿地開発の内容の一端を示しているのかもしれないが、ただ長畑遺跡で中期末の集落が短期で廃絶され、跡ノ口遺跡の包含層も不安定であったことは、中期末から後期初頭にかけての時期はかなり過酷な居住環境であった可能性も考えられる。

古代には三宅川を挟んだ対岸に国分寺、その北西には国分尼寺、さらに北東に至れば国府というように、古代尾張地方の行政的な中心地に隣接している。したがって、付近に古代の遺跡が存在することも当然といえ当然である。逆にそうした遺跡が発見されていない条件こそ問うべきか。この点は中世も同様である。

(石黒立人)



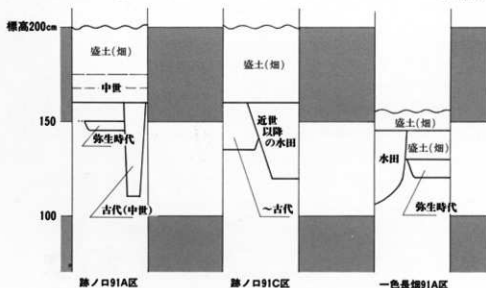
Ⅱ．調査の成果

A．基本層序

跡ノ口遺跡周辺には島田と水田が点在し、調査区は両者にまたがる位置にある。90A区・90B区は、水道管理設による破壊部分の北側が水田で、水田耕土下面是標高1.2mと低い。耕土直下は青灰色シルト層で、古代以降の包含層は存在しない。この青灰色シルトは西で厚く東にいくほど薄くなる。調査区東部では青灰色シルトと下部の灰色砂層の間に黒色砂層の堆積する部分もあった。南側は島田で、標高1.6mを境として上部には、それぞれ30cmほどの厚さのある耕土が1層・2層、その下部に比較的時期が遡るとと思われる耕土（中世の畠か？）が薄く3層・4層として存在する。3層はほぼ水平に堆積し、遺構は4層以下から検出された。4層は一部の土坑や90B区で多数検出された畝状の溝を埋めている。遺構のベースは黄灰色シルトであるが、90A区・90B区では黄灰色シルト層中からそれぞれ1ヶ所の弥生土器片を伴う炭化物層が検出された。この炭化物はきわめて薄い粗砂に覆われていたが、粗砂の範囲は炭化物層の範囲を超えるものではなかった。弥生土器はこれら炭化物層以外の地点からも出土している。90C区は水田造成による削平が著しく包含層・遺構は部分的な残存にとどまったが、黄灰色シルトのベース上に灰褐色シルト層（包含層）が堆積するという本来の堆積状況の一端が窺えた。

一色長畑遺跡は遺構外での包含層の残存は認められなかった。SB01・03の埋土上部には褐色シルトが堆積しており、包含層であったかどうかはわからないが暗色系の有機化の進んだ層位の形成が窺われる。

(石黒立人)



第3図 基本層序

B. 跡ノ口遺跡

(1) 遺構

a. 弥生時代

90A区と90B区からそれぞれ1ヶ所づつ炭化物層の広がりが出され、このうち90B区で検出された炭化物層の範囲は長軸で約3mを測った。これら炭化物層は部分的に焼土を伴ない、また弥生土器片が炭化物層と伴に出土したことから、それが建物の床面、あるいは焼失建物である可能性が考えられた。しかし、竪穴建物が焼失したのであればその輪郭はある程度明確になると思われるが、検出状況では範囲は決して明確ではなかったから、せいぜい床面の存在を示すにとどまるだけかもしれない。ところで、これら炭化物層の検出面は当初ベースと考えていた層位であり、しかも炭化物層の延長に不整合面の存在を示す痕跡は認められない。分析結果を参考にすれば、集落の存在ではなく、人間活動の痕跡が存在しただけに過ぎないと言えるのかもしれない。

90C区では、90A区・90B区とは異なり、ベース上に堆積していた灰褐色シルト層に古代土器とともに弥生土器が含まれていた。これが本来の包含層の存在を示唆するならば、当時の地表面はかなり起伏があったことになる。検討課題である。

b. 古代

古代土器が遺物出土量全体のかなりの部分を占めていることから、古代が本遺跡の主要な部分であることは確実である。しかし、包含層の確定は確実ではなく、特に90A区では古代土器が出土しても中に中世土器の小片が含まれていることがあり、この点で中世土器が出土していない点を根拠とする古代遺構の特定は難しい。それでも一応は、中世土器の混入がなく古代土器がまとまって出土したものとして、SK03・14・19、SD06をあげることができる。

90B区や90C区では90A区と異なり中世土器の出土はほとんどなく、古代が主体になると考えられる。SK22からは牛下顎骨が底面に密着して出土した。SK25・26は埋土が黒色有機土と明灰色シルトが斑状に混ざりあった埋土で、他と大きく異なる。

c. 中世

SD01は幅約2.4m、深さ約0.8mを測る溝で、ゆるく東に湾曲して終息する。溝の断面形は逆台形を呈している。土層セクションによれば掘り直しが行われているようだ。14世紀前半には埋没している。SD02の埋土は砂層と植物層のラナミが発達し、かなり流れのある流路（小河川？）である。時期については当初古代土器を中心とする遺物が多量に出土したことから古代に比定したが、その後中世土器の小片が含まれていたことがわかり中世に変更した。しかし、古代土器の比率はかなり高く、古代の包含層が本来は安定して分布していたことが想像される。

SD03は、杭と貫によって近・現代水路が構築される以前の水路である。埋土から遺物は出土しなかったが、砂と植物のラナミが形成されている点はSD02と類似している。検出時での深さは約0.5mを測った。
(石黒立人)

(2) 遺物

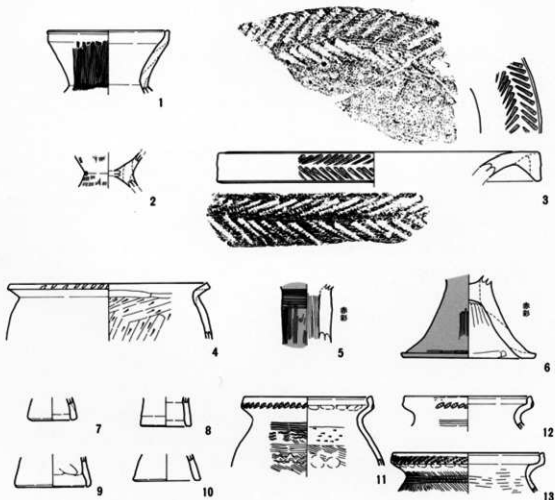
a. 弥生時代中期

第4図-1は受口状口縁壺で、口縁部は強くナデられ、また頸部外面には非常に細かいハケメ調整が施されている。2は壺の脚片である。

第5図-3はハケメ工具による圧痕が頸部に施された壺片で、体部外面はナデ調整されている。2は壺の口縁部片で、口縁端部にハケメ調整の後にハケメ工具で羽状圧痕が加えられている。3はハケメ調整壺である。伊勢系であろう。4は朱痕深鉢である。朱痕は浅く口縁部内部の櫛刺突紋も浅い。土器以外には、刃部に連続した小刻離と擦痕が認められる、円礫から横割された刮片を素材とする粗製刮片石器が1点出土している。

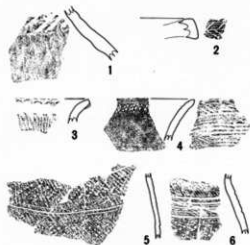
b. 弥生時代後期

第4図-3は大形壺の口縁部片である。口縁部内部と口縁端部にハケメ工具による羽状



第4図 出土遺物 (1) 1/4

庄真紋が施されている。色調はやや褐色がかり、胎土には雲母が目立つことから伊勢地方からの搬入品と思われる。図示はしていないが、別個体と同じ特徴をもつものが90B区の炭化物層から出土している。4は内面にケズリが施されている当地方で一般的な甕である。5は外面に赤彩が施された高杯の脚部片で、柱状を呈する点は時期が古いことを示唆している。6も高杯の脚部片で赤彩が認められる。



第5図 出土遺物(2) 1/3

7～10は灰褐色を呈する甕の脚部だが、ナデ調整でハケメは認められない。後述す

る受口状口縁甕の脚部の可能性が高い。11は口縁部屈曲部にハケメ工具による刻み、体部外面には櫛ではなくハケメ工具によってなでつけたような直線紋および振幅・波長とも一定しない羽状紋が交互に施されている。口縁部内面にはユビオサズ痕、体部内面には横方向のケズリとハケメが認められる。12は11に比べて器壁がやや厚い。口縁部屈曲部にハケメ工具による刻みが施されている。

13は搬入品と思われる。口縁部には強いヨコナデ調整が加えられ、内面にユビのアタリ痕が凹面をなし、頸部側には稜が形成されている。口縁部はゆるく湾曲して立ち上がり、その外面に櫛による刺突紋が施されている。口縁部の仕上がりは他にくらべてシャープである。体部には直線紋が観察できる。

第5図-5・6は受口状口縁甕の体部片である。櫛による刺突紋と直線紋が観察できる。搬入品か？

土器以外には、90B区の炭化物層から叢石が1点出土している。 (石黒立人)

b. 奈良～平安時代

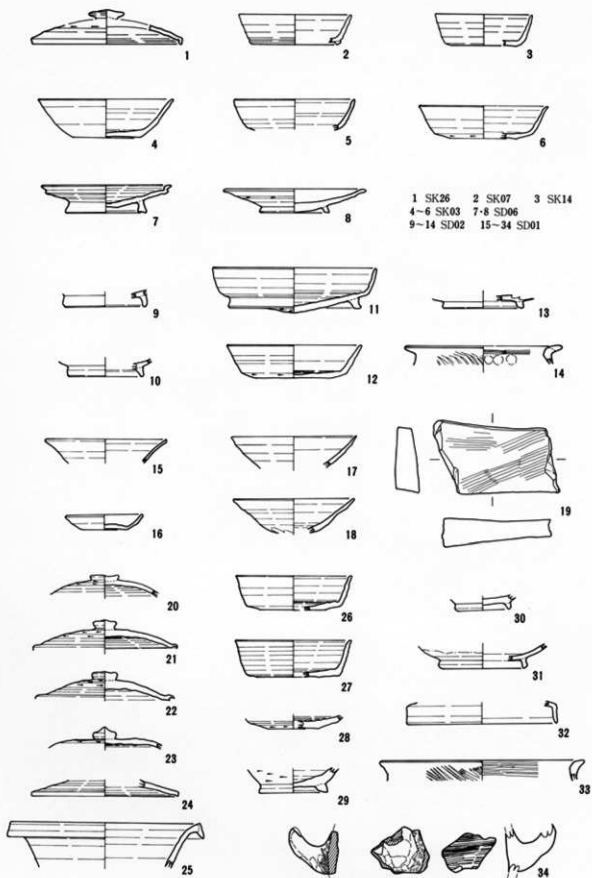
SK26出土の第7図1は、同一個体と思われる杯蓋の宝珠部と口縁部で、外面上部2/3に回転ヘラケズリがなされている。第7図2・3は杯で、SK07出土の2には、方形の高台がやや斜めに付けられる。SK14出土の3は、底部外面に回転ヘラケズリがなされている。これら3点については、C-2号窯式～1-25号窯式に比定される。

第7図4～6はSK03出土の杯で、4の底部外面には回転糸切り痕があり、6の底部外面には回転ヘラケズリがなされている。3点ともO-10号窯式に比定される。

SK31から出土した杯(第6図)の底部外面には、回転糸切り痕の上に墨書が書かれている。2字あるこ



第6図 出土遺物(3)

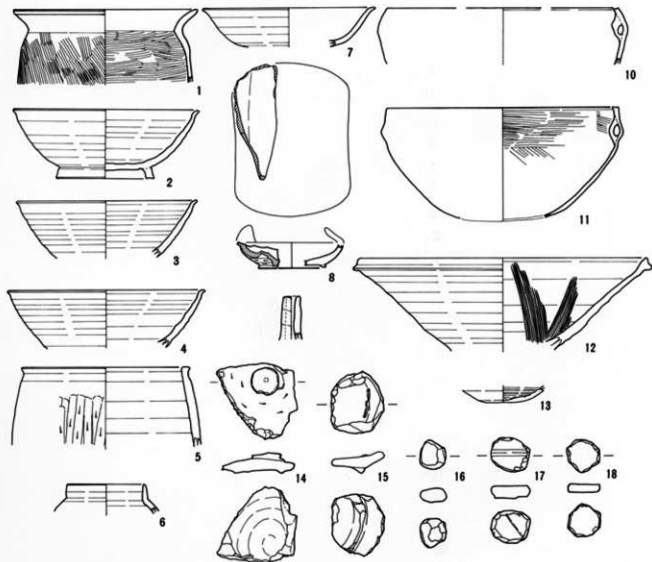


第7圖 出土遺物(4)

とは確認されるが、上位のものは欠損して判読不能で、下位のものは「宋」と読むことができる。時期は、O-10号窯式のものと考えられる。

SD06出土の第7図7・8のうち、7の盤は、底部外面に中央部を除いて回転ヘラケズリがなされており、口縁部はS字状に強く折れる。8はやや外反する口縁部をもつ皿で、わずかに内湾する台形の高台がみられる。また、杯部外面には部分的に回転ヘラケズリがなされており、内部には淡緑色の灰釉がみられる。時期は、IG-78~K-14号窯式期にあたるであろう。

SD02出土の第7図9~14は2時期に分かれる。ひとつは、三日月高台をもつ9・10で、杯部内面に灰釉がみられる。時期はK-90号窯式期になる。もうひとつは、11~13の杯と14の土師質の甕で、前者より古いO-10号窯式に比定される。11は外反する高台をもつ杯



第8図 出土遺物 (5) 14-18は1/3、他は1/4

で底部が高台より下位に突出する。12は無台の杯で、11・12とも底部外面に回転ヘラケズリが施される。14は端部が水平になるくらい強く外反する口縁部で、荒いハケで調整されている。

中世の講SD01に混入して出土した第7図20～33は、2時期に分けられる。20～24の杯蓋、26～28の無台杯、25・29の壺、33の土師質甕はO-10号窯式～IG-78号窯式にあたるもので、30・31の杯、32の蓋はK-90号窯式に比定される。31の杯部外面には、ハケ塗りの灰釉が施されている。

包含層より出土したもののうち、第8図1は7世紀代（後半か）に遡るもので、第7図2～4の深い杯や甕（5）、壺（6）はO-10号窯式に、第7図7の碗や8の耳皿、9の浄瓶の上端部はK-14号窯式に比定されている。

c. 室町～戦国時代

SD01出土の第8図2～4の碗は、3点とも器壁が薄く、胎土が精製されたもので、3の外面下部には静止ナデがみられる。7の皿の胎土も精製されたもので、黄白色を呈している。底部内面には静止ナデ、外面には回転糸切り痕がみられる。4点とも美濃系施釉系陶器で、白土原1号窯式～明和1号窯式（13世紀末～14世紀初頭）に比定される。19は砥石である。

包含層出土の第8図10・11の内耳鍋と12の鉄軸の施された摺鉢、13の重皿は、大窯前半期（15世紀末～16世紀初頭）のものに比定される。

d. 加工円盤（第8図14～18）

14は定形化した加工円盤ではなく、破損した須恵器杯蓋（時期はO-10～IG-78号窯式期）の側面の一辺を打ち欠いたものである。15～18は定形化したもので、北部系灰釉系陶器の高台部（13世紀後半）を中心に円形に打ち欠いた15や、鉄軸陶器を用いた18、近世の灰釉陶器を用いた16・17がある。（宮腰健司）

（3）自然科学的分析

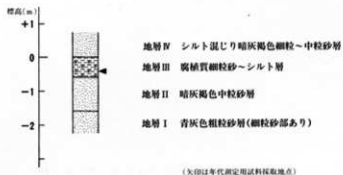
跡ノ口遺跡の発掘調査終了後、基盤層の堆積環境を観察するために跡ノ口遺跡91A区において深掘りトレンチを設定した。観察された地層は、第9図に示した。

本遺跡の地層は、確認できた範囲で下位より地層Ⅰ～Ⅳの4層に区分できる。地層Ⅰは標高-1.6m以下に分布する青灰色粗粒砂層で部分的に細粒砂層をレンズ状に挟んでいる。地層Ⅱは標高-1.6～-0.6mに分布する暗灰褐色中粒砂層である。これら2つの砂層は沖積上部砂層を構成するものと考えられる。地層Ⅲは植物片を交える腐植質細粒砂層で、標高-0.6～±0m付近に分布する。地層Ⅳは跡ノ口遺跡の遺跡基盤（いわゆる地山）を構成するシルト混じりの暗灰褐色細粒～中粒砂層で、標高±0～+0.7m付近に分布している。地層Ⅲ・Ⅳは沖積最上部粘土層と考えられ、日光川および三宅川の氾濫により形成された自然堤防の一部を構成する地層と思われる。遺跡の形成に直接関連すると思われる地層Ⅲについては堆積環境を推定するために珪藻分析を試みたがほとんど検出されなかった。

遺跡基盤層の形成年代を求めるために、地層Ⅲ（腐植質細粒砂層の標高-0.35mの部分）より採取した試料の¹⁴C年代測定を行い次に示す結果を得た。なお測定は、頼パリーノ・サーヴェイに依頼したものを学習院大学が行った。（服部俊之）

＊¹⁴C年代測定結果

跡ノ口遺跡 地層Ⅲ（腐植質細粒砂層） GaK-16366 2720±150y. B.P.



第9図 跡ノ口遺跡91A区の遺跡基盤層

C. 一色長畑遺跡

(1) 遺構

a. 弥生時代

堅穴建物 SD01～05までの5棟を検出したが、明確な柱穴や炉跡の検出できたものはない。したがって、すべてが建物になるとは限らない。

SB01は北半分が調査区外にある。長軸の長さは4.7mを測り、深さは0.2mであった。埋土は大きく2層に分かれ、上部が褐色シルト、下部が明灰褐色シルトである。湧水のために床面の確定は不十分で、柱穴の検出もままならなかった。

SB02はSK01・02によって切られている。床面の確定は不十分で、柱穴は検出できなかった。深さは0.15mであった。埋土は上部が暗灰褐色シルト、下部が明灰褐色シルトである。

SB03は唯一全体が調査できた堅穴建物である。プランは隅丸長方をなし、長軸長5.3m、短軸長3.5mの規模で深さは0.15mを測った。柱穴はいくつか検出したが、床面の確定が不十分であったために特定できない。埋土は上部が暗灰褐色シルト、下部が明灰褐色シルトである。

SB04はプランがやや小判形をなし、短軸は4.8mを測り、深さは0.1mであった。散乱した遺物とともに炭化材・炭化物・焼土が出土し、焼失建物のようである。

出土した遺物には、土器・石器がある。土器には復元可能なものと、小片のみのものがある。いずれも焼土よりは浮いて、炭化物と同レベルから出土した。復元不可能であった土器については、堅穴の残存深度がきわめて浅いこと、炭化した建物部材が非常に少なかったことに示されているように、上部がかなり削平されている可能性も非常に高いので、当初から破片が破棄されたものであるかどうか明らかではない。

石器には石鎌・石錐・磨製石斧・コア・フレイク・原石などがある。磨製石斧は破片・破片が散乱して出土したが、分布は南東壁付近に集中し、また接合したものもあることから、すべて同一個体と思われる。

SB05はSB04と同様に、埋土に炭化物や焼土が含まれていることから、焼失建物と考えられる。

土坑 SK01は径0.8m、深さ0.05mの土坑である。埋土は暗灰褐色シルトで、上部から土器片が出土した。

SK02は長さ2m、幅0.9m、深さ0.07mの土坑で、埋土は上部が暗灰褐色シルト、下部は明灰褐色シルトであった。上部から土器がまぎって出土した。

SK03は0.6×0.65mの規模で、Ⅲ系壺が出土した。

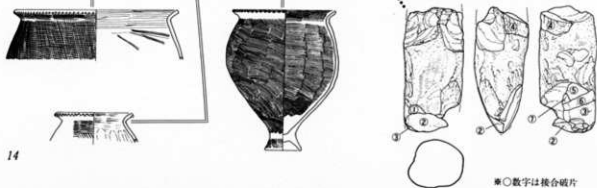
SK04はプランが2.5×2mの方形を呈するが、底面の傾斜が強いことから建物ではない。

と考えた。埋土は上部は暗灰褐色シルト、下部が明灰褐色シルトである。土器片が出土した。

b. 弥生時代以降

S K05は遺物の出土はなかったが、埋土が乳褐色シルトなので中世以降に下ると思われる。

プランは明らかにならなかったが、SB01の東隣に土坑が1基存在することを土層セクションで確認した。埋土は斑状をなし、中世墓である可能性がある。(石黒立人)



(2) 遺物

a. 土器

SB03 第11図1は受口状口縁壺である。口縁部・頸部外面にはハケメ状工具による波状紋が施されている。

SB03 第11図2は粗いハケメ調整が施された「く」字状に強く折れる口縁部を有する甕である。肩部には横ハケメが直線状に加えられている。3・4は凹線紋系土器の甕で内面にケズリが加えられている。3は低い脚台を有し、外面にはタタキ痕が観察できる。

第12図1は口縁部外面に二枚貝刺突紋、口縁部内面に瘤状突起を複数配する伊勢地方の壺(搬入品)である。2も同じく伊勢地方の甕(搬入品)で、肩部に直線紋が施される。3は知多半島以東からのⅢ系壺の搬入品である。10は受口状口縁壺である。伊勢地方から近江地方からの搬入品である。

SB04 第11図5～8は貝田町式系の在地品。同図9・10、第12図4～8は凹線紋系土器の一群である。第11図11は伊勢地方の甕で搬入品。

5は口縁部の外反が弱い壺で、口縁端部外面にヘラ刻み、頸部外面には櫛描直線紋が施されている。6は壺底部で横位ミガキが認められる。7はほぼ復元できた台付甕である。内部に細かいハケメ調整が加えられている。脚部外底面は充墳により膨らんでいる。8は台付甕脚部片であり、ナデのみでハケメは認められない。体部はハケメ調整であろう。

第11図9は細頸壺口縁部である。強いヨコナデが加えられた後に、口縁部外面には櫛の押し引き紋、屈曲部にはヘラ刻みが加えられている。10はやや大形の甕で、体部外面はタタキのあとハケメが施されている。内面下部にはケズリが加えられている。第12図4・5は、それぞれ細頸壺と太頸壺の口縁部である。6・7は壺片で、櫛描直線紋が施されている。8は無紋の壺体部片である。第12図9は、粗いハケメ工具を原体として、調整・施紋が施されている。体部内面はユビオサエ気味のナデが施されている。

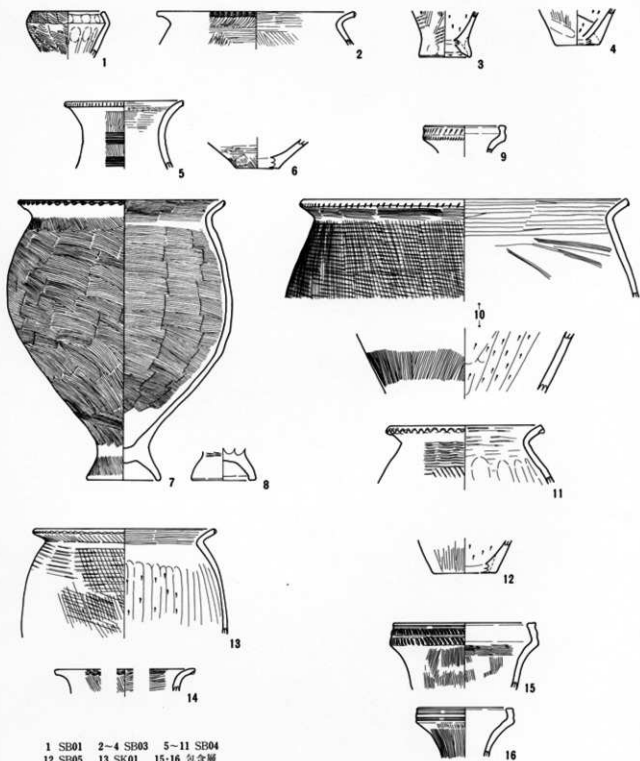
SB05 第11図11は甕の底部で、内面にケズリが観察できる。

SK01 第11図13はやや風化して特徴がはっきりしないが、体部外面上部はタテハケメ→ヨコハケメ、体部下半はタタキ→ハケメである。内部にはケズリが観察できる。

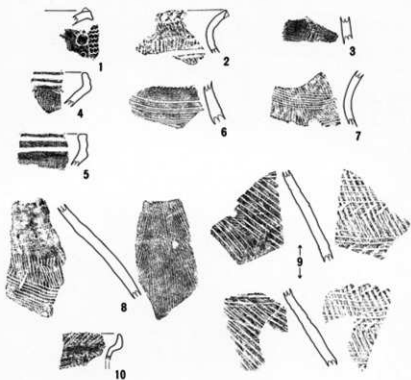
SK02 第11図14は緩く外反する口縁部を有する甕で伊勢地方からの搬入品の可能性がある。第12図9は甕の肩部片である。外面にはハケメ工具による直線紋2帯と刺突紋3段が観察できる。内面には斜めの粗いハケメが観察できる。下部にはおそらくケズリが施されているだろう。

SK03 第12図11は知多半島以東に分布するⅢ系壺である。体部が膨らみ始めた新しい段階の資料である。

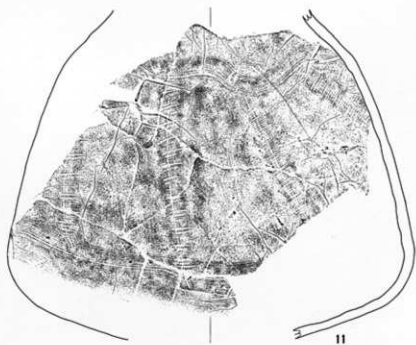
包含層としてあがっている土器には、第11図15・16がある。15は凹線紋を施した後に、ハケメ工具で刻みを加えている。



第11圖 出土遺物(6) 1/4



1-3-10 SB03 4-7 SB04
9 SK02 11 SK03



第12圖 出土遺物 (7) 1/3

b. 石器

SB04 1は磨製石斧で、破片を接合した状態で実測している。

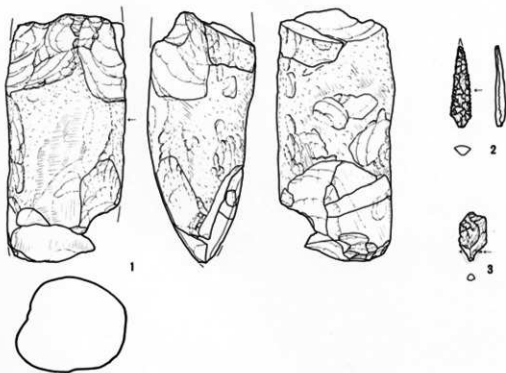
側面図で明らかのように、両主面は対称ではなく歪みがある。表面には敲打痕が全体に残存し、研磨面は刃部付近に限られている。

基部側の破面は端部の稜が敲打によってややつぶれている。刃部は敲打によって刃部に剥離が生じているとともに、小さな剥離の集中する部分もある。多数の破片が出土したことは、敲打が継続して行われたことを示している。

2は下呂石製の石鎌である。やや非対称的である。中央やや先端よりの側縁に小さく段が形成されている。側縁はやや鋸歯状をなしている。基部は両側からの剥離が浅く、舌状になっている。

3は石錐である。錐部は稜線に摩耗痕が観察できる。

(石黒立人)



第13図 SB04出土石器 1/2

(3) 自然科学的分析

a. 一色長畑遺跡の地質と¹⁴C年代

一色長畑遺跡の発掘調査終了後、跡ノ口遺跡と同様に基盤層の堆積環境を観察するために91A区において深掘りトレンチを設定した。観察された地層は、第14図に示した。

一色長畑遺跡においては地層Ⅰ～Ⅲの3層までが確認できた。地層Ⅰの底面は確認できなかったが、標高-3.0m以下に分布する植物片混じりの暗灰色腐植質シルト層でマシジミの貝殻片や水生昆虫のヒメガムシの羽などが見ついている。地層Ⅱは黒灰色シルトないしは粘土層で標高-3.0m~-1.5mに分布している。地層Ⅲは、一色長畑遺跡のいわゆる地山を構成する地層で、シルト混じりの暗灰褐色細粒~中粒砂層が標高+1.2m付近まで分布していた。

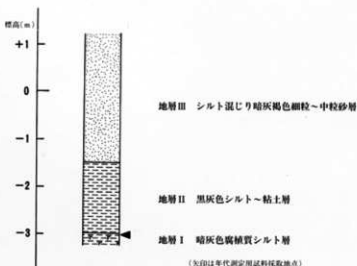
遺跡基盤層の形成年代を求めるために、地層Ⅰ（暗灰色腐植質シルト層の標高-3.0m部分）で採取した試料の¹⁴C年代測定を細バリオ・サーベイを通じて学習院大学に依頼し、以下の測定値を得た。

*¹⁴C年代測定結果

一色長畑遺跡 地層Ⅰ（暗灰色腐植質シルト層） GaK-16365 2880 ± 100y. B.P.

この年代値は一色長畑遺跡の地層Ⅰと跡ノ口遺跡の地層Ⅲの腐植質シルト層の形成時期がほぼ同じであることを示している。しかし、腐植質シルト層の分布高度が一色長畑遺跡の標高-3m程度に対し跡ノ口遺跡では0~-1mであり、このことは、縄文晩期の頃にこの地域に比高2mを越す谷地形（埋積浅谷）が存在した可能性を強く示す。これは森(1992)の埋積浅谷Ⅱに相当し、古川(1972)の「弥生の小海退」により形成された地形であろうと考えられる。

(服部俊之)



第14図 一色長畑遺跡91A区の遺跡基盤層

b. 一色長畑遺跡における植物珪酸体分析

① はじめに

植物珪酸体は、植物体内で形成されたガラス質の細胞であり、植物が枯れた後も微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定、および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 1987）。

一色長畑遺跡（91A区）の発掘調査では、弥生時代中期末とされる住居跡が検出され、その用途や性格が検討課題となっていた。そこで、同住居跡の試料について植物珪酸体分析を行い、イネをはじめとするイネ科栽培植物の検出、および当時の植生や古環境の推定を試みた。

② 試料

試料は、弥生時代中期末とされる住居跡の床面直上から採取された№1～№22の計22点である（図1）。

③ 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原, 1976）をもとに、次の手順で行った。

(ア) 試料の絶乾（105℃・24時間）

(イ) 試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm、約0.02g）

※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量

(ウ) 電気炉灰化法による脱有機物処理

(エ) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）

(オ) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥

(カ) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパレート作成

(キ) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパレート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5} ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、ウシクサ属はススキの値を用いた。その値はそれぞれ2.94（種実重は1.03）、6.31、1.24である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ属の値は0.48、クマザサ属は0.75である。

④ 分析結果および考察

(ア) イネ科栽培植物の検討

弥生時代中期末とされる住居跡の床面直上から採取された№1～№22の計22試料につい

て分析を行った。

その結果、全体の41%にあたる9試料からイネの植物珪酸体が検出された。密度は1,000個/μ前後といずれも低い値である。なお、籾殻(穎の表皮細胞)に由来する植物珪酸体はいずれの試料からもまったく検出されなかった。これらのことから、住居跡内に少量の稲葉が持ち込まれたことは想定されるものの、稲葉や稲穂が貯蔵されていたことは考えにくい。今後、比較試料として住居跡の埋土や周辺土壌の分析を行うことによって、さらに詳細な検討が可能になるものと思われる。

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族(ムギ類が含まれる)やキビ族(ヒエやアワ、キビなどが含まれる)、オヒシバ属(シコクビエが含まれる)、トウモロコシ属、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)などがあるが、これらの分類群はまったく検出されなかった。

(イ) 古植生および古環境の推定

上記以外の分類群では、ヨシ属やウシクサ族型、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、棒状珪酸体、基部起源などが検出された。また、部分的にウシクサ族(ススキ属など)やクマザサ属型(おもにクマザサ属)なども検出され、ブナ科などの樹木起源もわずかに見られた。植物体量の推定値(表2)によると、ヨシ属が最も卓越しており、ウシクサ族(ススキ属など)も部分的に多くなっている。

ヨシ属は、特に住居跡の中央部付近で多くなる傾向が認められ(図2-2)、ヨシ属の基部起源と見られる植物珪酸体も比較的多く検出された。また、ウシクサ族(ススキ属など)も住居跡の中央部付近で多く見られた(図2-3)。これらのことから、住居跡中央部付近の床面には、ヨシ属の茎葉およびススキ属などが敷かれていた可能性が考えられる。

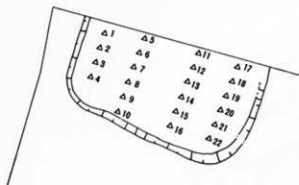
⑤ まとめ

弥生時代中期末とされる住居跡の床面直上から採取された№1~№22の計22試料について植物珪酸体分析を行った。

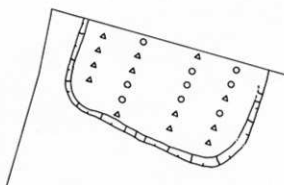
その結果、全体の41%にあたる9試料からイネの植物珪酸体が検出された。しかし、密度が低いことや籾殻に由来する植物珪酸体が検出されないことから、住居跡内に稲穂や稲葉が貯蔵されていたことは考えにくい。

なお、植物珪酸体の検出状況から、住居跡中央部付近の床面にはヨシ属の茎葉およびススキ属などが敷かれていた可能性が認められた。

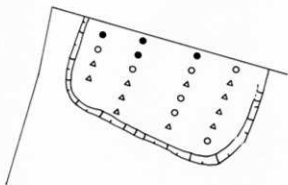
(古環境研究所)



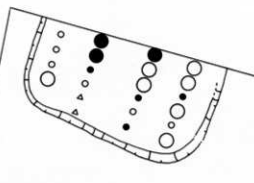
第15図 SB01における試料採取地点



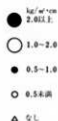
第16図 SB01におけるイネの検出状況



第17図 SB01におけるススキ属の検出状況



第18図 SB01におけるヨシ属の検出状況



参考文献

- 杉山真二 (1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点. 植生史研究, 第2号: p. 27-37
- 杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機能細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第31号: p. 70-83.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) 一數種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法一. 考古学と自然科学, 9: p. 15-29.
- 藤原宏志 (1979) プラント・オパール分析法の基礎的研究(3) 一福岡・板付遺跡(夜臼式) 水田および群馬・日高遺跡(弥生時代) 水田におけるイネ (*O. sativa*...) 生産総量の推定一. 考古学と自然科学, 12: p. 29-41.

(単位: ×1000個/g)

分類群	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22		
イネ科																								
イネ					7			7	6			7	13	12		5	6							
ヨシ属	5	7	7	24	36	44	13	7				42	20	26	12	6	11	31	30	15	31	5	25	
ウレタマ属(ススキ属など)	71	15		65	44	6						42	20	18	6									25
キツノ属	5			7	15	6								6										
ウレタマ属型	14	22	14	6	51	58	39	35	13			28	33	32	42	41	29	31	42	15	12	27	25	
ウレタマ属型(大型)																								
タケ原料																								
ネズミ属型	33	39	42	30	15	22	13	27	13	30	7	13	45	6	23	29	10	18	67	31	53	111		
クマヤシ属型	7		24	15	6	13	6				35	7	6	12	6									19
未分類等	9	22	21	18	29		13	13	13	18	28	26	26	18	17	10	24	10	12	37	37			
その他のイネ科																								
黍属属起源	9	7	7	6	7	15		7	6			14	7	6	6									12
穂状花序体	81	39	42	36	174	197	84	166	107	60	120	165	64	161	152	91	154	109	51	166	43	93		
葉部起源	9	22	14		22	29	13	7	19	12		7	13	42	23	69	67	12	15	6	5	19		
地下茎部起源					15	7		13	6	6														
未分類等	156	134	63	144	247	226	142	173	113	132	252	211	155	149	187	166	308	330	170	261	155	253		
樹木起源																								
ブナ科																								
ほめ地バズル状(広葉樹)							7																	6
その他																								
(雑草等)	7																							
植物性原料総数	393	326	217	287	682	671	335	485	399	258	599	521	460	477	451	417	621	478	545	503	331	612		

第1表 一色長瀬91A区SB01の植物性原料分析

(単位: kg/m² 乾)

分類群	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22		
イネ科																								
イネ																								
ヨシ属	0.30	0.47	0.44	1.51	2.29	2.76	0.81	0.42				0.19	0.38	0.35		0.15	0.18							0.36
ウレタマ属(ススキ属など)	0.88	0.18		0.81	0.54	0.68					2.87	1.25	1.63	0.75	0.37	0.72	1.94	1.91	0.97	1.96	0.34	1.56		
タケ原料												0.53	0.35		0.23	0.07								0.31
ネズミ属型	0.16	0.14	0.20	0.14	0.07	0.10	0.06	0.13	0.06	0.14	0.03	0.06	0.22	0.03	0.11	0.14	0.05	0.09	0.32	0.15	0.26	0.53		
クマヤシ属型	0.06	0.10	0.18	0.11	0.05	0.10	0.05	0.26	0.05	0.05	0.26	0.05	0.05	0.09	0.04	0.05	0.09	0.19	0.14					0.14

表1の原料の収比(1.0と仮定)と各原料の換算係数をかけて算出。

第2表 一色長瀬91A区SB01における主な分類群の植物性原料の収比

Ⅲ．まとめ

A．弥生時代石器の終末をめぐる

伊勢湾地方における弥生時代石器の終末については、残念ながらこれまでまとまった研究がなされていないので、ここで簡単に問題点の整理をしておきたい。

伊勢湾地方の弥生時代をⅣ期区分して、Ⅰ期～Ⅳ期までの石器を整理すると、Ⅳ期からⅤ期の間で大きく変化することがわかる。

Ⅳ期の単純遺跡には尾張地方では甚目寺町大洞遺跡があるが、この遺跡では伐採用・加工用の磨製石斧の他に打製および磨製の石鏃が出土している。名古屋市瑞穂遺跡でも石鏃が多く出土している。基本的にⅣ期までは各種石器が、量的にままとまっているとは言えないまでも、残存ではなく〈組成〉として存在していることがわかる。三重県津市の丘陵部に位置する山籠遺跡でも大形磨製石包丁を始めとして各種石器が出土し、石器は〈組成〉として安定的に出土している。

それではⅤ期はどうであろうか。名古屋台地に位置するⅤ期～Ⅵ期の弥生後期遺跡の多くでは礫石や凹石の出土例はあるものの、磨製石斧や石鏃の出土例はほとんどない。見晴台遺跡では柱状片刃石斧が出土しているが、転用されたものようで、一次的な使用が何えなだけでなく、出土量も少なすぎる。

三重県南部の松阪市川原表B遺跡は丘陵上に位置する集落跡で、Ⅳ期末からⅤ期初頃の年代幅におさまる住居跡群が検出されている。ここでは、少量ながら石鏃と磨製石斧片が出土している。磨製石斧については明確ではないが、石鏃はこの時期まで残っているとすれば、上述した名古屋市瑞穂遺跡の石鏃にも一部Ⅴ期のものが含まれているかもしれない。

現状の資料の様相から見て、磨製石斧や石鏃はⅤ期以降に、前者は鉄斧に、後者は銅鏃あるいは鉄鏃に変わることは確実であろう。しかし、実物資料は板状鉄斧が豊川市郷中遺跡で出土している以外に、普及がどの程度であったかわからない。銅鏃については朝日遺跡ほかの多くの遺跡で出土例があるが、石鏃が狩猟用及び武器用であったとしても、銅鏃は石鏃の減少を補完するほどの出土量もないので、両者が用途的に同じであるとはなかなか言い難い状況である。

さて、石器の消滅は、単に素材変換というにとどまらず、石材の産地と消費地の関係、石器製作技術および石器使用方法、そして石器の用途・機能（社会的な意味）等々、文化・社会に占める石器体系の全般的な消滅でもある。それは単に鉄器（金属器）化される—石器体系の穴を鉄器によって埋める—というだけにとどまるものではないだろう。そ

して、N期までの社会が石器を基盤的な道具にしてきた、ということの意味も、それが社会的・文化的な価値であったということである。したがって、その価値が鉄器の有効性というただ1点のみによって変換されるとはとうてい考えられない。一体だれが鉄器の有効性を宣伝したというのであろうか。

鉄器の有効性は結果であって、前提ではない。この意味で、石器から鉄器への価値移動をもたらした原因は何であり、それはどのような状況であったのか、があらためて問われる必要があろう。

B. 調査成果のまとめ

(1) 跡ノ口遺跡

①遺跡周辺に点在する鳥畑には、水田化を免れたものと、水田化後に新たに鳥畑になったものが存在することが明らかになった。したがって、前者の鳥畑下には遺跡が残存している確率が高い。

②弥生時代中期末から後期初めの土器や石器が出土したこと、炭化物層が存在したことなどから、弥生時代に属す遺構群の存在が伺われた。

③古代の集落跡が一部の鳥畑下に残存していることが明らかになった。

④調査区の西端で検出した中世の大溝は、屋敷地の存在を示しているようだ。

(2) 一色長畑遺跡

①跡ノ口遺跡と同様に、周辺に点在する鳥畑には、水田化を免れたものと、水田化後に新たに鳥畑になったものが存在することが明らかになった。したがって、前者の鳥畑下には遺跡が残存している確率が高い。

②弥生時代中期末単純期の集落跡が検出できた。5棟検出された住居跡のうち2棟は焼失家屋であった。しかし、失火によるものかどうかはわからない。

③プラントオパール分析では、SB01からイネ起源のプラントオパールが低率で認められたものの、朝日遺跡例のような籾殻起源のものは無かった。かわりにヨシ属あるいはススキ属による動物があった可能性が考えられるらしい。朝日遺跡では炭化した動物が検出されており、その可能性は高い。

(石黒立人)

跡 / 口遺跡

●遺物一覧

遺構番号	引違番号	瓦幅 (cm)	短軸 (cm)	底面積高 (cm)
S901	91A-S901	---	250	118
S902	91A-S901	---	---	92
S903	91A-S902	---	---	137
S904	91A-S904	---	22.5	142
S905	91A-S903	---	87.5	150
S906	91A-S904	---	115	135
S907	91Ba-S903	---	100	156
S908	91Ba-S905	---	87.5	149
S909	91Ba-S902	---	75	150
S910	91Ba-S901	---	---	145
S911	91Ba-S909	---	25	149
S912	91Ba-S908	---	30	145
S913	91Ba-S908	---	30	---
S914	91Ba-S911	---	45	145
S901	91A-S902	105	47.5	147
S902	91A-S902	180	115	124
S903	91A-S905	185	130	118
S904	91A-S906	---	112.5	119
S905	91Ba-S907	122.5	75	132
S906	91Ba-S903	115	90	138
S907	91Ba-S902	95.5	130	125
S908	91Ba-S905	135	85	123
S909	91Ba-S909	70	35	149
S910	91Ba-S904	85	40	140
S911	91Ba-S910	85	50	144
S912	91Ba-S908	---	---	127
S913	91Ba-S901	102.5	---	140
S914	91Ba-S906	127.5	85	---
S915	91Bb-S901	125	---	103
S916	91Bb-S911	---	---	107
S917	91Bb-S910	117.5	110	112
S918	91Bb-S902	120	70	125
S919	91Bb-S912	120	---	119
S920	91Bb-S903	---	130	106
S921	91Bb-S912	132.5	105	127
S922	91Bb-S904	---	---	128
S923	91Bb-S916	170	90	130
S924	91Bb-S917	---	---	140
S925	91Bb-S906	---	220	117
S926	91Bb-S908	102.5	100	104
S927	91Bb-S918	---	118	---
S928	91Bb-S915	115	65	111
S929	91Bb-S919	---	87.5	125
S930	91Bb-S914	---	200	86

瓦葺回数	葺層番号	出土遺物
第 4 層 -1	91A-99	瓦片
-2	91A-47	瓦片
-3	91A-51	瓦片
-4	91A-43	瓦片
-5	91A-44	瓦片
-6	91A-46	瓦片
-7	91A-60	瓦片
-8	91A-62	瓦片
-9	91A-63	瓦片
-10	91A-61	瓦片
-11	91A-67	瓦片
-12	91A-21	瓦片
-13	91A-33	瓦片
第 5 層 -1	91A-50	瓦片
-2	91A-70	瓦片
-3	91A-55	瓦片
-4	91A-54	瓦片
-5	91A-66	瓦片
-6	91A-28	SK01
第 6 層	91Bb-9	SK31
第 7 層 -1	91Bb-8	SK12
-2	91Bb-3	SK07
-3	91Bb-7	SK14
-4	91A-33	SK03
-5	91A-32	SK03
-6	91A-34	SK03
-7	91A-31	SK09
-8	91A-30	SK09
-9	91A-27	SK13
-10	91A-25	SK13
-11	91A-24	SK13
-12	91A-29	SK06
-13	91A-26	SK13
-14	91A-23	SK13
-15	91A-12	SD10
-16	91A-5	SD10
-17	91A-13	SD10
-18	91A-15	SD10
-19	91A-51	SD10
-20	91A-1	SD10
-21	91A-5	SD10
-22	91A-4	SD10
-23	91A-16	SD10
-24	91A-2	SD10
-25	91A-7	SD10
-26	91A-6	SD10
-27	91A-20	SD10
-28	91A-11	SD10
-29	91A-3	SD10
-30	91A-14	SD10
-31	91A-17	SD10
-32	91A-10	SD10
-33	91A-19	SD10
-34	91A-18	SD10
第 8 層 -1	91A-56	瓦片
-2	91A-38	瓦片
-3	91A-58	瓦片
-4	91A-41	瓦片
-5	91A-37	瓦片
-6	91A-36	瓦片
-7	91A-40	瓦片
-8	91A-39	瓦片
-9	91A-42	瓦片
-10	91A-48	瓦片
-11	91A-65	瓦片
-12	91A-49	瓦片
-13	91A-45	瓦片
-14	91A-35	瓦片
-15	91Ba-14	瓦片
-16	91Ba-13	瓦片
-17	91Ba-19	瓦片
-18	91Ba-18	瓦片

一色長畑遺跡

●遺物一覧

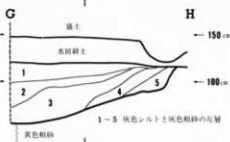
遺構番号	引違番号	瓦幅 (cm)	短軸 (cm)	底面積高 (cm)
S901	S901	---	475	107
S902	S901	---	---	114
S903	S903	650	360	113
S904	S904	---	240	120
S905	S905	---	---	125
S901	S902	---	87.5	112
S902	S903	202.5	85	107
S903	S904	87.5	---	120
S904	S901	---	127.5	110

瓦葺回数	葺層番号	出土遺物
第 1 層 -1	91A-1	SK01
-2	91A-4	SK02
-3	91A-2	SK02
-4	91A-3	SK03
-5	91A-11,12	SK04
-6	91A-10	SK04
-7	91A-28	SK04
-8	91A-5	SK04
-9	91A-13	SK04
-10	91A-26	SK04
-11	91A-6	SK04
-12	91A-16	SK02
-13	91A-17	SK02
-14	91A-18	SK02
-15	91A-20	瓦片
-16	91A-19	瓦片
第 2 層 -1	91A-22	SK03
-2	91A-24	SK02
-3	91A-25	SK03
-4	91A-9	SK04
-5	91A-8	SK04
-6	91A-14	SK04
-7	91A-7	SK04
-8	91A-15	SK04
-9	91A-21	SK02
-10	91A-23	SK03
-11	91A-27	SK02

図版

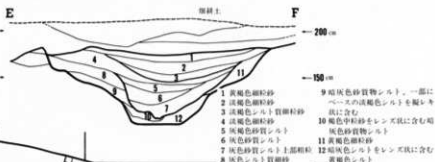
- 遺構 …………… プラン 1:200
 - …………… 土層セクション 1:100
- } 1~3・10
-
- 写真 …………… 遺構 4~7・11~13
 - …………… 遺物 8・9・14・15

●SD02土層セクション(1:40)



X = -84,790

●SD01土層セクション(1:40)

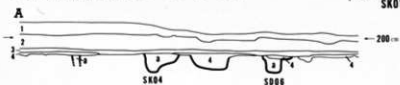


X = -84,800

91A区



●91A区南壁土層セクション(1:100)



X = -84,820

X = -84,820



- 91A区南壁土層セクション(1:100)
- 1 暗灰褐色土
2 基灰色土
3 灰褐色砂まじりシルト
4 灰褐色砂まじりシルトとBaseの黄灰色シルトのセクランした層
5 黄灰色シルト
6 黄灰色細砂
7 風化物層(住居跡?)
8 黄褐色シルト(黄灰色シルトブロックを含む)
9 黄灰色シルトアロック

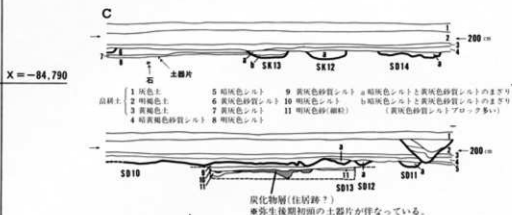
Y = -37,550

Y = -37,570

Y = -37,560

跡ノ口遺跡

●91B区南壁土層セクション(1:100)



X = -84,790

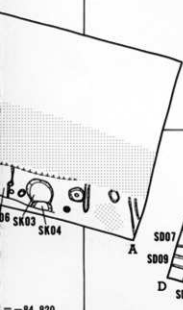
X = -84,800

●SK14土層セクション(1:40)



※SX01の上部は近・現代水田。SX01は、その下部の不定形の落ち込みである。埋土には植物層が陥込に含まれていた。

X = -84,810



X = -84,820

91B区

Y = -37,560

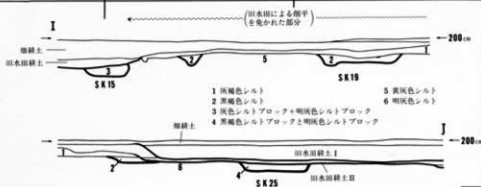
Y = -37,550

Y = -37,540

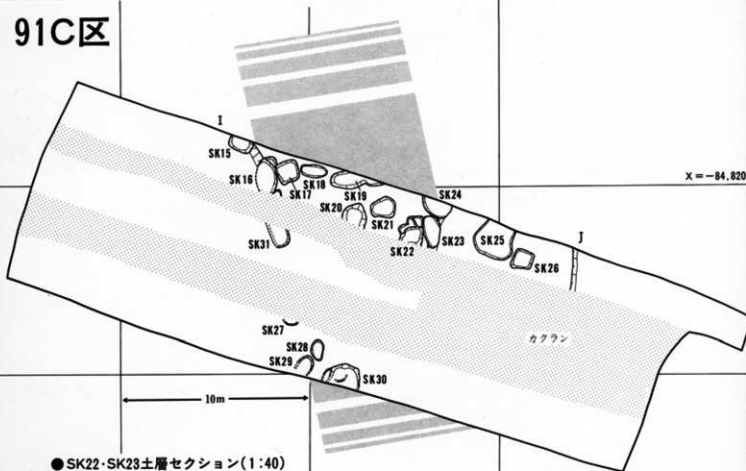
Y = -37,530

●91C区北壁
土層セクション(1:100)

X = -84,810



91C区



X = -84,820

●SK22・SK23土層セクション(1:40)

X = -84,840



Y = -37,530

Y = -37,510

Y = -37,500



▲ 91A区 遠景 (東から)

▼ 91A区 全景 (東から)





◀ 91A区
近景

(東から)



● SD01

(北東から)

● SD02

(南東から)



● SD06

(北東から)

● 弥生土器

出土状態



◀ 弥生土器
大形壺

91B区 ▶
近景
(東から)



SK14遺物出土状態 ▶
(西から)

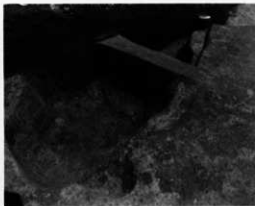


91C区 ▶
近景
(南西から)





◀91C区
近景
(東から)



● SK18 ● SK19
(北から) (南西から)



● SK25 ● SK22
SK26 牛の下顎骨
(南東から) 出土状態
(西から)



5-4



4-3



4-13



4-11



5-5



4-4



外

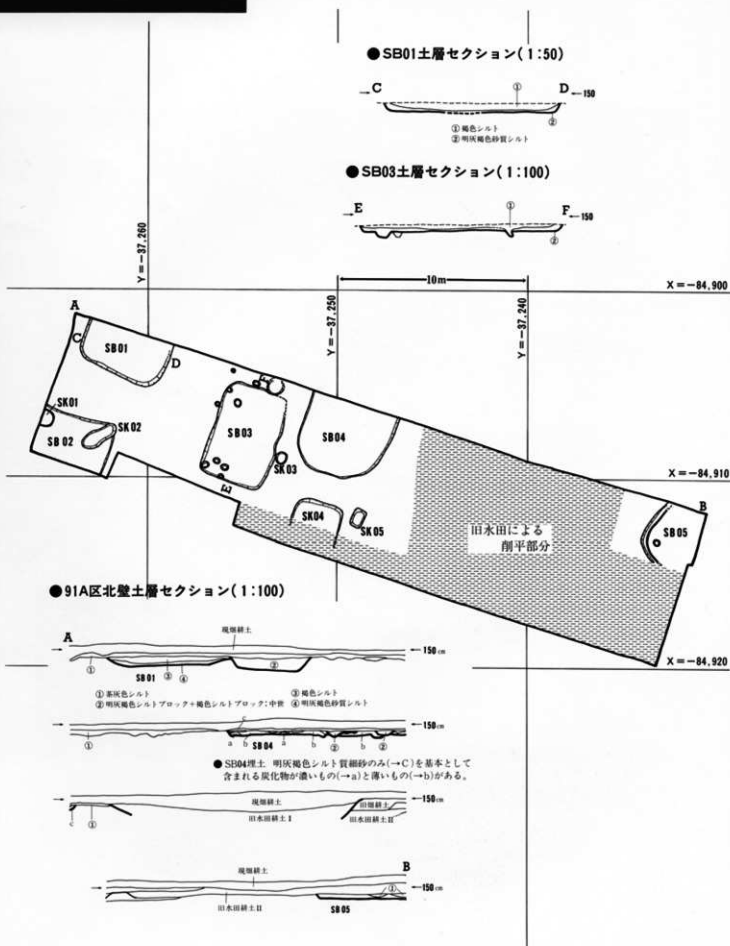
内



粗製刮片石器



一色長畑遺跡





▲ 91A区全景（南東から）



▲ 91A区 西半部 (東から)



● SB01
(西から)

● SK04
(北東から)

● SB02/SK01・02
遺物出土状態
(南東から)

● SB02/SK01・02
完掘状態

● SB05
(北東から)

● SK03
(南から)



◀ SB04
遺物出土状態
(東から)



◀ 同上
(南から)



◀ 同上
(北東から)





13-2



13-3



▲ SB04磨製石斧片出土状態 (南から)



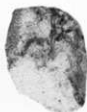
13-1



b: チャート・コア



c: チャート・コア



d: 砥石



e: 敲石



g: 下呂石原石



h: 下呂石原石



f: 敲石

ふなほしみやうら
船橋宮裏遺跡

例言

1. 本書は、愛知県稲沢市船橋町花の木・宮裏・市場にかけて所在する船橋宮裏遺跡の調査報告書である。(稲沢市遺跡登録番号は4-54)
2. 調査は県道稲沢祖父江線建設に伴う事前調査として実施し、愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成3年(1991)11月～平成4年1月まで財団法人愛知県埋蔵文化財センターが行った。
3. 調査は小塚俊夫(主査、現七宝町立七宝中学校)、赤塚次郎(調査研究員)が担当し、寺沢なつ江氏のご協力を得た。
4. 調査にあたっては次の各関係機関のご協力を得た。
愛知県教育委員会文化財課・愛知県埋蔵文化財調査センター・愛知県一宮土木事務所・稲沢市教育委員会
5. 本書の執筆は第Ⅰ・Ⅱ章を赤塚次郎が、第Ⅳ章を堀木真美子が分担し、第Ⅲ章は吉岡郁夫氏(愛知学院大学教授)より玉稿を賜わった。なお編集は赤塚が担当した。
6. 遺物整理において加賀良子・杉山美智子・牛田長子氏のご協力を得た。
7. 本書の作成にあたり以下の方々のご指導を得た。(敬称略)
愛甲昇寛・北条献示・日野幸治・塚本ゆかり・江崎 武・森 勇一
8. 調査区に使用した座標は国土座標第Ⅱ系に基づくものである。
9. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターに保管。

目 次

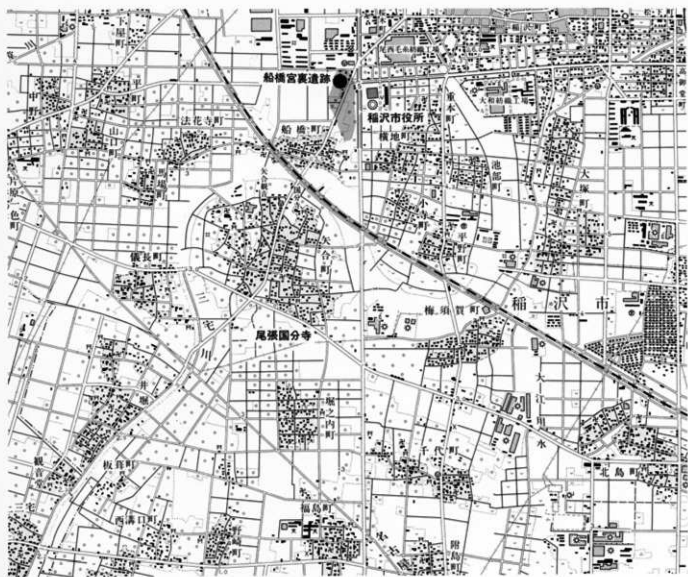
I	調査概要	3
II	遺跡	4
III	火葬施設の人骨	17
IV	古環境復元	21
	別表	22

挿図目次

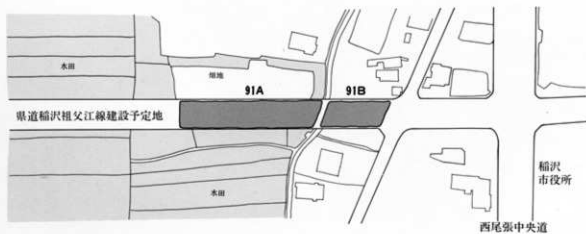
第1図	遺跡位置図	2
第2図	調査区位置図	2
第3図	基本勝序	4
第4図	土壌分類	7
第5図	土壌出土遺物	8
第6図	SK01断面図	8
第7図	SK01出土遺物	9
第8図	主要遺構配置図	9
第9図	SX02	10
第10図	SE01	12
第11図	SE01・03出土遺物	11
第12図	SD08出土遺物	13
第13図	SD09・13出土遺物	13
第14図	加工円盤	13
第15図	遺構平面図1	14
第16図	遺構平面図2	15
第17図	遺構平面図3	16
第18図	古環境変遷図	20

図版目次

図版1	出土遺物
図版2	遺構全景
図版3	遺構
図版4	SX02出土人骨(1)
図版5	SX02出土人骨(2)
図版6	SX02出土人骨(3)
図版7	SX02出土人骨(4)
図版8	SX02出土人骨(5)
図版9	SX02出土人骨(6)
図版10	SX03出土人骨



第1図 道跡位置図 (1:25000 国土地理院 清洲より)



第2図 調査区位置図 (1:2000)

I 調査概要

概要

船橋宮裏遺跡は愛知県稲沢市船橋町花の木・宮裏・市場にわたって広がる遺跡（北緯35°14'40"、東経136°46'50"）であり、西尾張中央道（県道65一宮蟹江線）を挟んでその西側には稲沢市役所が存在する。稲沢市教育委員会『稲沢市遺跡分布地図』（1987）によると遺跡番号4-54、古代～中世期の遺物散布地として登録されている。しかし遺跡内における発掘調査は今回が初めてであり、遺跡の具体的な性格は不明瞭な状況であった。なお今回の調査地点は船橋宮裏遺跡の範囲内としては北端部に位置する。

発掘調査は平成3年（1991）11月から翌平成4年（1992）1月にかけて、県道稲沢祖父江線建設予定地内において実施した。調査面積は1600㎡である。工程上の都合から水路・生活道路を挟んで東西にA・B区を設定して発掘調査を行ない、その結果A区を中心に室町時代の遺構の広がり確認でき、南北に細長い微高地上に遺跡が展開することが明らかとなった。調査地点の現況は、Aに畑地が存在しその周囲は水田耕作地である。

調査区内では遺構の大半が15世紀内にまとまり、方形・円形土坑を中心に、溝・井戸が配置され、さらに火葬施設が確認できている。こうしたことからこの地点が室町時代の墓地として設定されていたことが想定できる。

環境

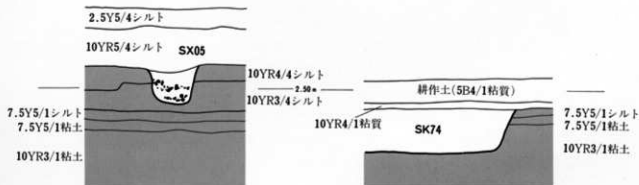
船橋宮裏遺跡は稲沢市のほぼ中央部を流れる三宅川の右岸自然堤防上に立地する遺跡であり、周辺部には数多くの遺跡が存在していることが知られている。特に遺跡が位置する場所は、三宅川が大きく蛇行する地点にあたり、その右岸一体にはほとんど連続する遺跡群が形成されている。今そのうちの中世期の遺跡を選びだすと、船橋宮裏遺跡に接した東には弥生時代からの複合遺跡として知られる重木・横地遺跡が大きく展開し、さらにその南には小市畑遺跡、平野・小寺遺跡、船橋市場遺跡が存在する。こうした三宅川右岸自然堤防上に広く展開する中世期の遺跡群の内では、船橋宮裏遺跡は最も西端部に位置することになる。遺跡周辺の現況は南北に長い畑地とその西側に水田が広がっている。なお船橋宮裏遺跡から南約1kmには尾張国分寺跡が存在し、西へ同じく約1kmには尾張国分尼寺推定地である馬場・法花寺遺跡が存在する。

II 遺跡

1 層位

基本層位はA区に残る畑地の部分と、他の水田地域と大きく2つに分けて考えることができる。前者（第3図左図）では遺構検出面までに大きく3つの層が認められる。上位から2.5Y5/4シルト（第2層）が堆積する現在の耕作土で、その下には10YR5/4シルト（第2層）が約40cmほど厚く堆積し、さらに遺物包含層である10YR4/4シルト（第3層）が約15cm認められる。具体的には遺構の掘削面を第3層内に置くことができる。その内最も新しい遺構の掘削は火葬施設の第3層直上からのものであり、その他は第3層中位に想定できる。したがって、最終的にはA地区畑地部での遺構検出は、第3層下位（遺構検出面）において行なった。第4層は10YR3/4シルトで、遺物の包含は確認しておらず、その下位には10YR4/3シルト面（第5層）が見られる。したがって、畑地として利用されているたかまりは、少なくとも室町時代には微高地として遺構が掘削されていたものと考えられる。さらに極わずかではあるが、SD02より須恵器片が出土しており、微高地の形成が中世・鎌倉時代にあるのではなく、古墳時代以前に遡る可能性が推定できる。

一方の水田面（3図右図）では耕作土を除去すると僅かに10YR4/1粘土層が残存するが、その下はただちに第5層が露出し、後世の削平が広範囲に進行していることが窺い知れる。



第3図 基本層位（1：40）

2 遺構の概要

検出できた遺構は室町時代に所属するものが全てである。ただA区畑地東端に存在するSD02からは僅かながら須恵器片が出土し、古墳時代後期に通る可能性がある。室町時代の主要な遺構は下記のとおりである。

土壌61基、火葬施設5基、井戸3基、溝12条。

調査区での遺構の在り方は土壌を主体とする墓域と考えられるものであり、大きく3区分することができる。すなわちA区中央部の畑地に展開する土壌群集中部、A区西部にまとまりを確認できる大型の土壌群が展開する部分、そしてA区東端からB区にかけての散漫に大型の土壌が営まれた部分である。土壌は明らかにA区中央北側部を中心に配置され、加えて井戸が営まれており、こうした在り方はさらに調査区外北側に大きく広がる様相を見せている。因みに火葬施設は土壌群集中部周辺に展開する傾向が読み取れる。またA区で検出できた小規模な溝は、その多くが幅40～50cmの細長くL字に折れ曲がるものであり、なんらかの区画を表わす可能性が考えられよう。そのことは溝の方向性と一定間隔の配置状況から想定できる。こうしたL字小溝と土壌の組み合わせが1つの区画を表わすものであるとすると、それは墓域設定の基本原則をそこに見出させる可能性がある。

3 土壌

土壌61基を規模・形状・埋土の要素から大きく4つに分類することができる。

まず検出プランでの形状であるが、方形を呈するものと円形を呈するものがある。円形を呈するものは総じて規模が小さく、方形との重複関係を考慮するとはほぼ円形から方形への変化が認められる。次に規模であるが、極めて大規模なSK01を除外すると長軸4mを越える資料は認められず、2m未満に集中する。埋土はやはり層堆積が存在するSK01以外は、全て斑土が見られ「意図的な埋め戻し作業を伴う」ものである。こうした特徴は土田遺跡で見られる「方形土壌」と類似するものである。

以上の要素を基本に、特に長軸と短軸の比率を重視しその軸指数を問題にすると、33と67付近に大きな変換点が見られる。そこでこれらによって区分される領域を基にⅠ・Ⅱ・Ⅲ類と区分する。

Ⅰ類はほぼ長軸・短軸の比が近似する形態をもつもので、規模によってa・b・cに細分できる。Ⅰa・b類はおおよそ円形プランを呈するものが基本形であり、長軸1m以上のⅠc類は方形を呈する。

Ⅱ類は長軸対短軸の比が2・1となる長方形プランを呈するもので、最も多く検出でき

た。当遺跡で営まれた土壌の基本形と考えてもよいものである。a, b, c, d, e, fの6類に細分する。Ⅱa類は1m未満の小規模な土壌で、火葬施設とした遺構は全て含まれることになる。Ⅱb類以上は一定の相似形を呈する長方形プランをもつ土壌を考えられる。おおよそ1.3倍の比率で規模が増大するような傾向が窺える。

Ⅲ類としたものは長軸対短軸の比率が3・1以上のもので、SK60が相当する。

N類はSK01で、軸指数としてはⅡ類内にあるが、規模が飛躍的に大きく、層堆積をもつ唯一の土壌である。他の土壌とは大きくその性格が異なるものといえよう。

SK01

A区東部に存在する大型土壌で、楕円形を呈し、掘形は斜めに掘削される。上層にはシルトが、下層には粘土が堆積する。さらに最下層には10YR 2/1粘土が見られ、内部には骨片・植物遺存体が含まれていた。土壌がしばらく開口していたことが窺い知れよう。土器はおもに下層である粘土層から出土し、10~14は土鍋で、羽釜状を呈し焼成前に口縁部に小孔が穿かれる。15~26は精製の灰釉系陶器で、27は口縁部にヨコナデを施す土器系皿。9, 28, 29は灰釉を施す施釉陶器。灰釉系陶器碗は高台が欠落するものが主体を占め、土鍋の形態からも15世紀中葉を中心とする時期と考えてよいであろう。

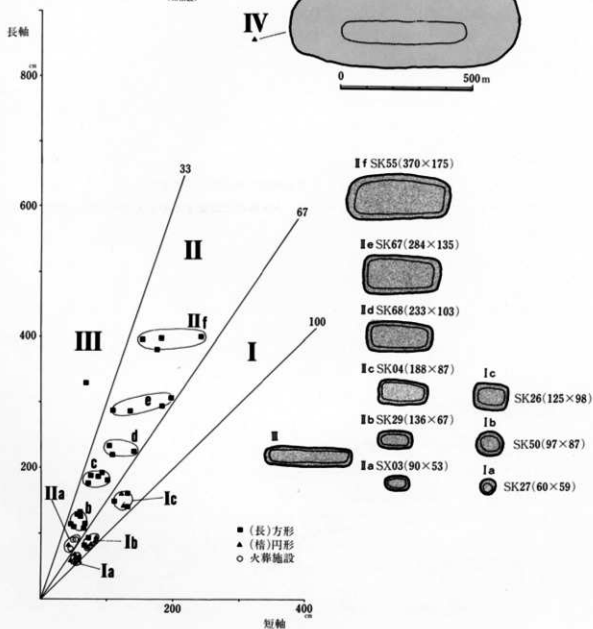
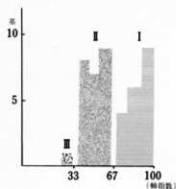
SK01は長軸方向をほぼ東西に置くもので、A区西部に群集するやや大型の方形土壌群と類似するようである。それは中央部土壌群やL字溝方向とやや異なる。

SK04

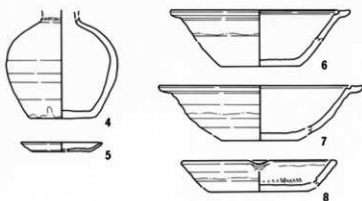
A区中央部北側に存在する方形土壌で、長軸をN-40°-Eに置き、1.88m×0.87m、深さ0.1mを測る。土壌の分類ではⅡc類に所属する。内部から古瀬戸壺1点が土壌底部よりやや上位にて出土している。調査区内での土壌では伴出遺物がほとんど認められないことから、やや特異な在り方を見せている。

SK52・53・54

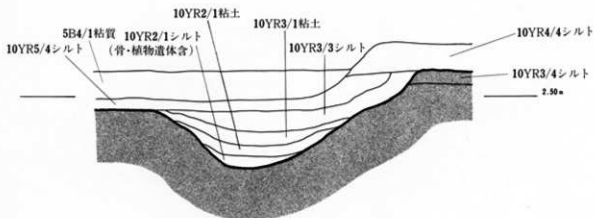
A区中央部に重複する土壌群。いずれも斑土を埋土とするもので、SK52・SK53, SK54の順に築かれたものと思われる。SK52は円形プランを有する(Ⅰb)のもので、SK53はⅡc類の典型的な方形土壌である。最後に掘削されたSK54は正方形のⅠb類で、円形プランを主体とするⅠb類としてはやや希少な例である。この事例から、円形から方形への変遷を認めることができよう。なお円形土壌群を区画するSD09は、SK52以前に設定されていることがその重複関係から明らかである。



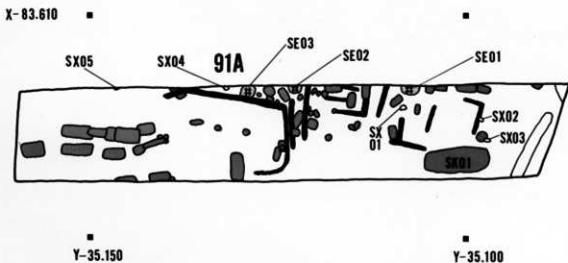
第4図 土壌分類

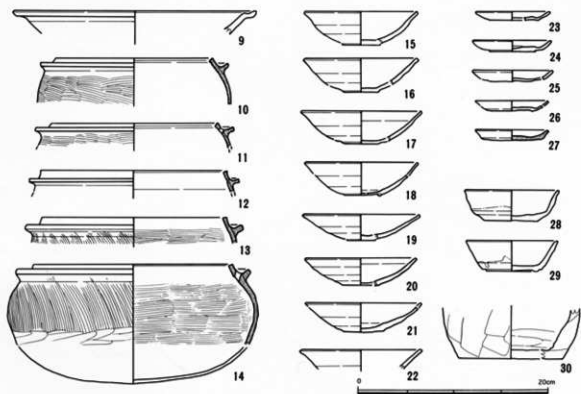


第5図 土曜出土遺物(4:SK04, 5:SK47, 6:SK37, 7・8:SK46)



第6図 SK01断面図(1:50)





第7圖 SK01出土遺物



X-83.640 ■
Y-35.070

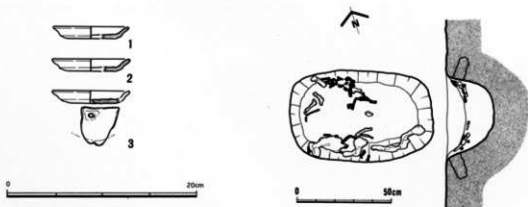
第8圖 主要遺構配置圖 (1:500)

4 火葬施設

骨・焼土・炭が堆積する楕円形プランの土壌で、A区北微高地内に展開する。もっとも残存状況が良好であったSX02の在り方から火葬施設と考えられる。調査区内では5基を確認でき、いずれも周辺の他の遺構との重複関係から最も新しく築かれたものであることが確認された。また層位的な掘削位置からもその点が傍証できよう。火葬施設が築かれた場所は、主に方形土壌が密集する中央部の周辺に散在する傾向が認められる。また土壌の分類では火葬施設は全てⅡa類に限定できる。なお中央部東に点在するSX01・2・3が主軸をほぼ東西に置くのにくらべて、西側のSX04・5は南北に置き、地点により方向性が存在する。

SX02

A区東部の微高地東端部で検出された火葬施設。検出時点でのプランは長方形形状を呈し、断面はややU字形で底面は若干平坦になる。長軸0.75m・短軸0.48mで深さ0.25mを測る。骨・炭は断面中層にまとまり、底部付近にはほとんど見られない。また土壌側面には斜めに打ち込まれたような棒状ビットが断続的に見られた。これらがどのような性格であったかを推定する手掛かりはないものの、火葬施設における上部構造を類推する資料とも考えられる。ただ他の火葬施設では検出できていない。なお棒状ビット内にも炭・骨片が僅かに認められた。主軸方位はN-72°-W。出土遺物としては土師器系皿を3点伴っていた。その内の1点は底部に焼成前穿孔が見られる。これら口縁ヨコナデを施した形状の資料は15世紀後半を著しく遡るものではない。



第9図 SX02（出土土器1:4、遺構図1:20）

5 井戸

SE01

A区東部北壁にて検出された井戸で、ほぼ1/2を調査区外に置く。井戸上部には7.5 YR 4/4粘土層が堆積し、その下部には10YR 6/1.4/2シルト斑土が見られ、おそらく意図的な埋め戻しによるものと考えられる。検出面でのプランは約2mの円形状を呈し、ほぼ垂直状に掘削され、深さ1.8mを測る。内部構造は、下部において方形枠組み痕（横組杖）を僅かに確認できたにすぎず、曲物は残存していない。出土遺物は極めて少なく、43・44の灰軸系陶器からは15世紀前半期のものと考えられる。なお45は青磁鉢である。

SE03

A区中央部北壁に位置する井戸で、やや隅丸形状を呈し、長軸22m・短軸1.8m・深さ1.55mを測る。曲物等の内部構造は認められない。遺物は33～39の灰軸系陶器を中心に出土し、39には底部に墨書が認められる。なおSD13とは南隅において重複し、SD13が井戸SE03を破壊して掘削されている。それは出土土器からも矛盾しない。

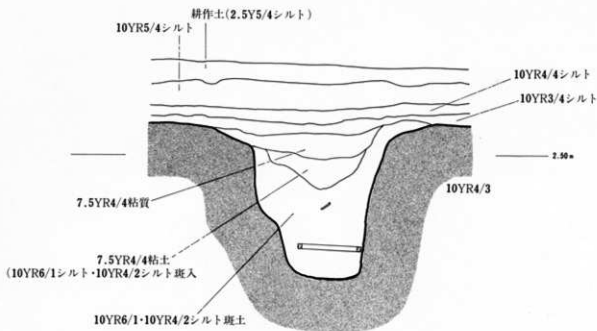
6 溝

SD08

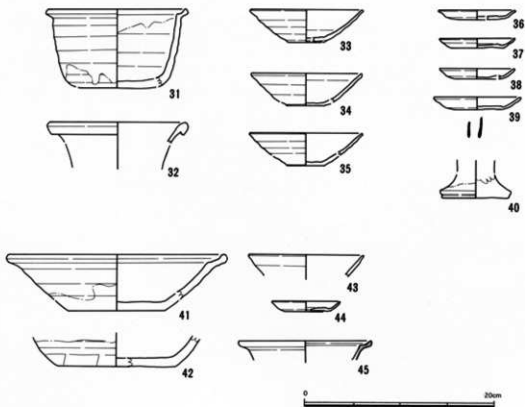
A区中央部に検出された南北方向の溝で、幅0.65m・深さ0.18mを測る。掘形はV字状に掘削され、現状では長さ6.5mであるが、南側では微高地端で消失しており本来はもう少し南へ延びていたものと思われる。また北端はSD13の屈曲部付近に相当しており、この地点が1つの区画域を表すものとも考えられる。なおSD08に平行する南北溝SD07との在り方から、両者が道に伴う側溝である可能性が考えられよう。SD08からは高台が欠落する灰軸系陶器碗(46・47)が見られ、57は口縁部に灰軸を施す施軸皿。15世紀前半期に所属するものが主体を占める。

SD09・13

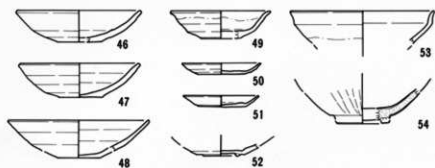
A区中央部に存在するコ字状に囲む溝で、現在の畑地利用の微高地に沿う形で検出された。水田化に伴い削平されているが、本来は西・南側にも溝が取り巻いていた可能性が考えられる。すると南北約10m、東西20m～18mほどの空間を復元できる。この内部にはSK50・51を代表とする円形プランの土塊が、ほぼ中央東西に配置されていたような在り方も推定できる。いずれにしてもSD09・13に囲まれた地点には土塊群が散在的に展開し、やや空白域的な状況を見せている。出土遺物は55～59は灰軸系陶器碗で、高台部が欠落し器高が低い。60～62は施軸折縁鉢、63は土鍋、64は砥石。これらの遺物はおもにSD13とSD09の屈曲部付近において出土している。



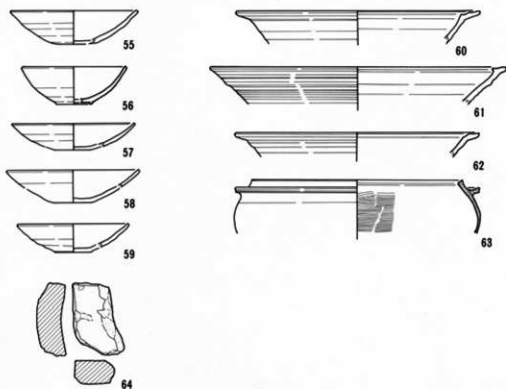
第10図 SE01 (1:50)



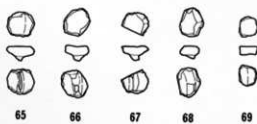
第11図 SE01-SE03出土遺物 (31-40: SE03, 41-45: SE01)



第12図 SD08出土遺物



第13図 SD09・SD13出土遺物



第14図 加工円盤

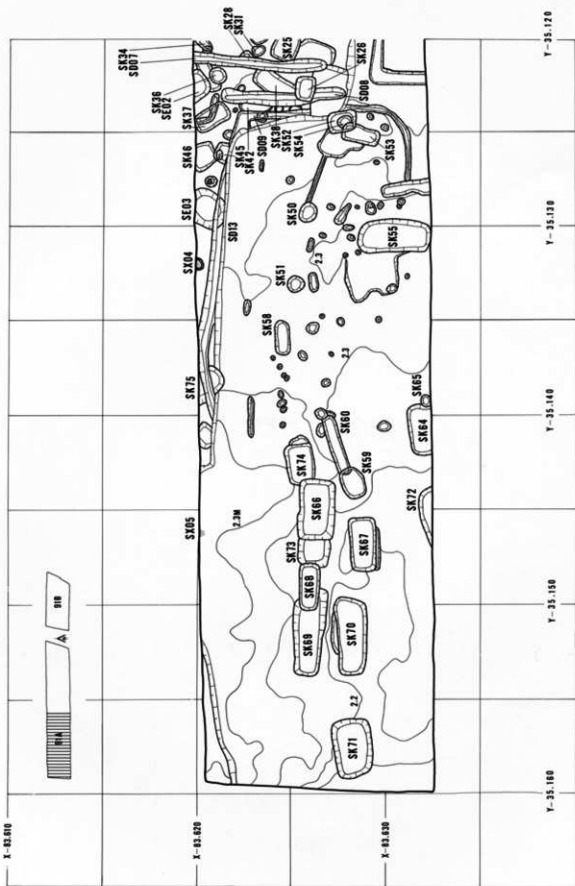
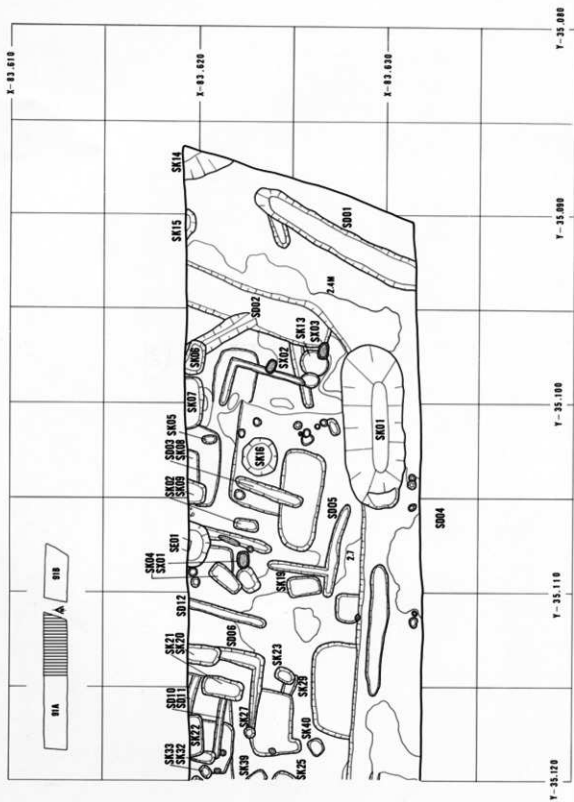
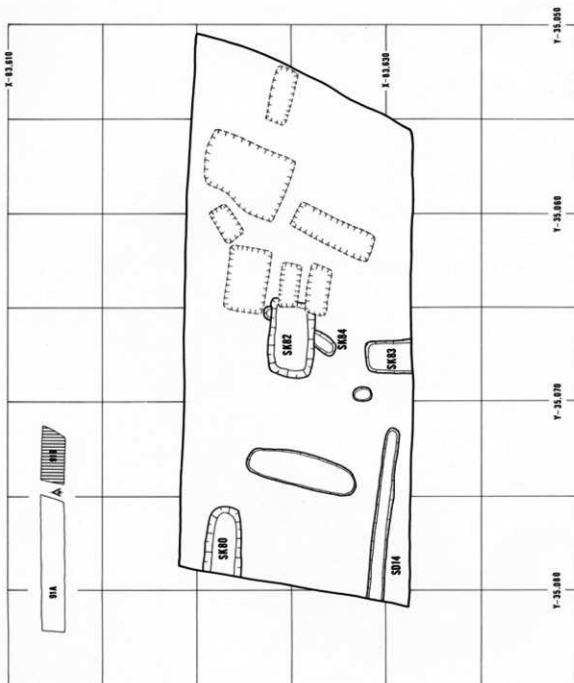


图15 遗址平面图1、91A区西平(1:200)



第16図 道横断面図2、91A区東半(1:200)



第17图 遺構平面図3、91B区(1:200)

Ⅲ 火葬施設の人骨

船橋宮裏遺跡の4ヵ所の火葬施設のうち、SX02とSX03から人骨が出土している。これらの人骨はきわめて小さい骨片が多いが、比較的大きいものもあり、かなりの数の骨名を同定することができた。

人骨の所見

安全な骨はなく、その多くは熱によって白色ないし灰白色となり、骨の表面に大小の皸裂のあるものが少なくない。熱による変形も多く、そのために同定に時間を要したものの、同定の不可能なもの、あるいは同一骨片でも接合できないものがある。骨名の明らかなものは次の通りである。

1) SX02

頭蓋骨：前頭骨（眉間から左眉弓および眼窩上縁内側部にわたる部分）、側頭骨（左右不明、鱗部）。前頭骨は変形と皸裂により、前頭切痕は不明。眼窩上孔を認める。眉間、眉弓の隆起は著しくないが、これによる性別の推定はできない。

体幹の骨：胸椎5、腰椎3、胸骨（胸骨柄）？、肋骨7片。椎骨はすべて椎体のみで、完全に近い椎体は1個にすぎない。この椎骨は第10胸椎と推定され、これを基準として他の椎骨を重ね合わせると、第7～11胸椎と推定される。第11胸椎と推定された椎体はただ1個の肋骨窩を有する（その他は各々2個）。腰椎と推定した椎体は5個の胸椎よりも大きく、肋骨窩を欠き、第1、4、5腰椎と推定した。第5腰椎と推定した椎体は楕円形に変形しており、仙骨から分離した第1仙椎の可能性も考えられる。肋骨には変形したものであるが、比較的大きい骨片のみを同定し、疑わしいものは除外した。7片の肋骨がそれぞれ別の骨か、同じ骨の破片を含むかは判断できない。

上肢骨：左鎖骨（胸骨端、肩峰端）、上腕骨（左右不明、中央部）、中手骨、手の右第1基節骨、右尺骨（肘頭）。鎖骨の両端部は大きさからみて、同じ骨と思われる。胸骨端の前縁は中央部へ移行する部位で急に細くなり、いわゆるnotch-like defectを示す。

下肢骨：右寛骨（腸骨翼後上部、腸骨体および寛骨臼上部までを含む腸骨前半部）、右大腿骨（頭、上部前面、上部後面、下部後面）、左大腿骨（頭、頸、体上半部）、左大腿骨（上部後面）、大腿骨（左右不明、上端部）、右膝蓋骨、左膝蓋骨、右脛骨（上部後面、下部後面）、左脛骨（外側頭、上部後面）、脛骨（左右不明、中部）、左腓骨（頭）、腓骨（左右不明、中部）。

これらのうち、左大腿骨骨幹部の上半部と上部後面とが重複し、少なくとも2個体分の骨格が含まれていることを示す。左寛骨は宮裏遺跡の出土人骨のうち最も大きい骨片であ

り、男性と推定される。5片の脛骨は重複していないが、同一個体に属するかどうかは不明である。左右脛骨の上部後面にはヒラメ筋線（ヒラメ筋付着部）があり、よく発達している。右脛骨上部後面の栄養孔は大きい。左右膝蓋骨は一部欠損しているが、ほぼ同じ大きさと推定され、同一個体に属するとみても矛盾はない。

2) SX03

頭蓋骨：右ラムダ縫合部？、左ラムダ縫合部、右側頭骨（乳突部）。外板の縫合はかなり鮮明であるが、内板のそれはほとんど消失している。

体幹の骨：胸椎4、腰椎2片、肋骨6片。胸椎は椎体の一部のみであるが、肋骨窩があるので、第10～12胸椎と推定した。椎体の1個は何番か不明である。腰椎1個は椎体の高さからみて、3～5のいずれかに属すると考えられる。他の1片は腰椎の左の下関節突起であるが、椎体と同じ骨かどうかは判断できない。

上肢骨：上腕骨（上部）？、上腕骨（左右不明、滑車）。

下肢骨：右寛骨（腸骨翼前上部）、右大腿骨（上部後面、下部後面、外側頭）、左大腿骨（下部後面、膝蓋面）、大腿骨（左右不明、中部後面）、右脛骨（脛骨粗面、中部後縁）、脛骨（下部）？、左腓骨（外果）。大腿骨の骨片のなかには、横断面の湾曲が変形し、太さが小さく見えるものがあるが、粗線（大腿四頭筋付着部）があるので、大腿骨と同定することができる。

個体識別

断片的な資料であるから、同側同名骨の骨片でも必ずしも同じ骨であるとはいえない。このような資料から、個体数、性別、年齢などを推定するには、多くの困難を伴うが、可能な範囲で試みることにしよう。

1) SX02

左右の大腿骨上端部（大腿骨頭および頸）には重複する部分はない。左右の不明な大腿骨上端部は前後両面を欠いているので、上記の骨と重複すると考えられたが、それらの空白の部分埋めるとすれば、必ずしも重ならない。しかし、左大腿骨体の上半部は左大腿骨体上部後面の小骨片と明らかに重複するので、少なくとも2個体分の骨が含まれている。

1体は寛骨の大きさから、やや小柄な個体と考えられるが、熱による変化も考えられる。しかし、右第1指の基節骨は現代人の平均的な大きさよりもやや小さく、寛骨と同一個体と仮定すれば、現代人に比べてやや小柄な体格であったと推測される。これは当時としては、平均的な大きさの範囲内にあるとみるべきかも知れない。

性別を最もよく表している骨は骨盤（寛骨）である。左寛骨の大きい骨片があるので、1体はかなりの正確さをもって男性と推定することができる。この寛骨は寛骨臼の一部を含む腸骨の前半部で、多少の変形はあるが、大きい骨片なので、正常に近い形を示しているとみて差し支えない。腸骨翼の外反は軽度で、女性骨盤のような著明な外方への開きは無い。腸骨稜の最も隆起した部分（腸骨結節）も扁平ではなく、山形をなしている。また、

腸骨翼に対する寛骨臼の位置は、女性骨盤ではやや前方に向いているのに対して、外方に面しており、この骨が男性であることはほぼ間違いないと考えられる。他の寛骨は小さいのと変形のため、性別の判定は困難である。

年齢を推定する手掛かりはまったくない。これらの骨片には、骨端の閉鎖していない若年者の骨は認められず、20歳あるいはそれ以後の成人とみなされる。

2) SX03

重複する部分は認められない。大腿骨と推定される骨片は多いが、小片のため判断できない。

性別を判定する手掛かりは、右寛骨のみである。これは腸骨稜前部を含む腸骨翼前上部の破片であって、外反の程度はSX03のそれと同様に軽度なので、もし著明な変形がなければ、男性と推定して差し支えなからう。

年齢はラムダ縫合から、成人であることは疑いない。外板の癒合は少なく、Broca 1～2度であるが、内板ではほとんど縫合が認められず、Broca 4度に近い。年齢の推定は主に内板によって行われるが、これに従うと老年ということになる。しかし、縫合の骨化には個体差があり、まれには壮年において縫合の消失を見ることがあり、とくにこのように骨の内側で著しい差が見られるのは、加熱の影響かも知れない。このような事情を考慮して、20歳代後半あるいはそれ以後と推定したい。

火葬について

人骨の所見より、SX02からは少なくとも2体分の人骨が出土している。土壌の大きさからみて、2体同時に火葬を行うことは困難であり、2回もしくはそれ以上使用されたと考えられる。

近年まで尾張地方で使用されていた火葬施設（ヤキバ、サンマイなどと呼ばれている）では、一度使用した後、次の火葬のために拾骨後の骨片や灰は近くの一定の場所に捨てていた。宮裏遺跡の遺構には、比較的大きい骨片が残っていたことに、多少の疑問が残るが、重複する別の骨片は小さく少ないこと、頭蓋骨が非常に少なくかつ小さい破片であること、四肢骨が多く残っていることからみて、頭蓋骨を主に拾い、放棄された骨片の大部分は最終的に火葬にした残りではないかと推測される。

稲沢市で近年まで使用されていた火葬施設は、宮裏遺跡のそれとほぼ同形の小判形であり、一部拾骨が行われていた。これらの施設は江戸時代の村絵図（天保12年（1841）およびその後）に記された「三昧」と同じ位置にあり、一部拾骨が行われていた。これらの三昧にヤキバがあったという記載はないが、江戸時代から引き続き使用されてきた可能性が考えられる。このような民俗の事例を、そのまま中世の火葬に当てはめることはできないが、宮裏遺跡の人骨の所見からみて、一部拾骨が行われていたのではないかと推定される。

謝辞

現代人の人骨との比較を行うに当たって、名古屋大学医学部解剖学教室星野沈教授に便宜を計っていただいた。また、稲沢市の火葬場跡の調査では、愛知県埋蔵文化財センター尾張事務所の赤塚次郎氏、稲沢市教育委員会の愛甲昇寛、北条献示、塚本ゆかりの諸氏のお世話になった。心から深謝の意を表します。

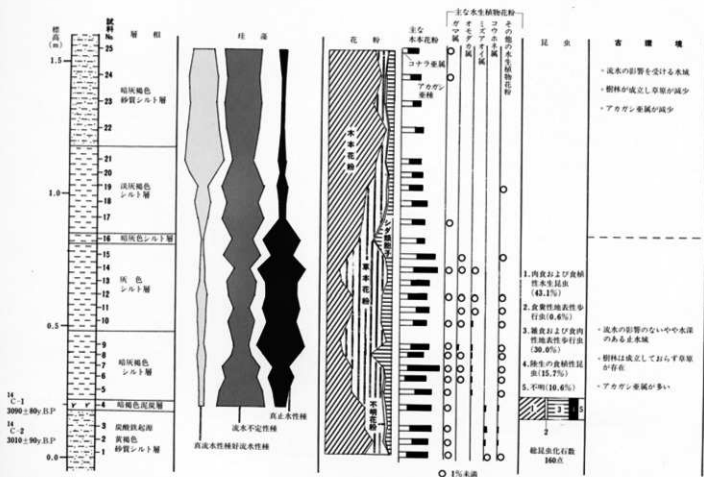


Fig. 2: 東端トレンチL1+0.82mの暗褐色泥炭層中の水質

第18図 古環境変遷図

IV 古環境復元

A・B区において、古環境の復元を目的に深掘りトレンチの掘削を実施し、¹⁴C年代測定・珪藻分析・花粉分析・昆虫遺体分析を行った。なお¹⁴C年代測定・珪藻分析・花粉分析は榊バリーノ・サーヴェイが、昆虫遺体分析は森 勇一氏（明和高等学校）が実施した。

それぞれの分析結果の概要を第18図に示した。なお試料番号1～3については、堆積環境の推定に必要な珪藻化石を産出しなかった。珪藻化石群集および花粉化石群集の傾向から2帯に分類され、下位から1帯・Ⅱ帯とした。昆虫遺体の分析は、91B区標高-0.1mに位置する腐植質シルト層および標高+0.2mに位置する暗褐色泥炭層の2層準から採取した試料について行った。

分析試料の下位にあたる1帯では、珪藻化石では好止水生種（*Aulacosira italica*, *A. distans*, *A. granulata*など）および好酸性種（*Eunotia*属、*Pinnularia*属など）が多産している。花粉化石群集はオモダカ属、サジオモダカ属、コウホネ属、スイレン属など水生および抽水植物のものが多く出現している。試料番号3の腐植質シルト層についての昆虫遺体分析の結果、出現昆虫の大半が水生昆虫（ガムシ、セマルガムシ、ゲンゴウロウなど）と湿地や水辺環境に多い地表性歩行虫（ツヤヒラタゴミムシ属、トックリゴミムシ属など）で占められた。以上の結果より¹⁴C年代測定によって測定値の得られた縄文時代晩期（3090±80y. B. P）の頃の堆積環境は次のように推定される。珪藻化石群集より、河川水などの流入が少なく、ところどころに水深のある止水域（およそ2m程度）が広がっていたと考えられる。草本花粉が多く出現することや地表性歩行虫が多産することから、遺跡周辺には草本植生が優占しており樹林は成立していなかったと思われる。また木本花粉でアカガシ亜属が多く出現していることから、暖温帯性の気候下であったと推測される。

Ⅱ帯では次のような結果が得られた。珪藻化石群集においては、上位に向かって流水性種（*Achnanthes japonica*, *Cymbella turgidula*など）が増加傾向を示す。花粉化石群集では前の時期に多く出現していたオモダカ属などの水生植物がほとんど出現しなくなり、草本花粉の出現率が著しく低下する。また、アカガシ亜属の出現率がやや減少している。これらのことから遺跡周辺は流水の影響を受ける氾濫原となり、堆積環境が不安定になっていったと考えられる。

〈遺構一覽〉

土壌

遺構番号	登録番号	長	短	深	断面	平面形	状	備考	分類
SK 0.1	SK 0.1	856	320	112	U字	南門形	A	大野土坑	
SK 0.2	SK 0.2	133	60	13	U字	方形	A		1 b
SK 0.4	SK 0.4	188	60	10	U字	方形	A	古瀬川産	1 c
SK 0.5	SK 0.5	78	44	9	風	南門形	A		1 b
SK 0.6	SK 0.6	180	102	12	風	方形	A		1 c
SK 0.7	SK 0.7	280		19	風	方形	A		
SK 0.8	SK 0.8			7	風	方形	A		
SK 0.9	SK 0.9		118	12	風	方形	A		
SK 1.3	SK 1.3	146	124			南門形	A		1 c
SK 1.4	SK 1.4			20	U字		A	砂質灰土	
SK 1.5	SK 1.5		200	21	U字		A	砂質灰土	
SK 1.9	SK 1.9	189	74	13	U字	方形	A		1 c
SK 2.0	SK 2.0		102	12	U字	方形	A		
SK 2.1	SK 2.1	217	106	12	U字	方形	A		1 b
SK 2.2	SK 2.2	220		10	U字	方形	A		
SK 2.3	SK 2.3	111	68	19	U字	方形	A		1 b
SK 2.5	SK 2.5	161	130	11	U字	方形	A		1 c
SK 2.6	SK 2.6	125	98	12	U字	方形	A		1 c
SK 2.7	SK 2.7	60	59	25	風	方形	A		1 a
SK 2.8	SK 2.8	62	50	28	U字	南門形	A		1 a
SK 2.9	SK 2.9	136	67	14	U字	方形	A		1 a
SK 3.1	SK 3.1	56	48	26	風	南門形	A		1 b
SK 3.2	SK 3.2	130	60	33	風	方形	A	炭化物	1 b
SK 3.3	SK 3.3	68	51	11	U字	方形	A		1 b
SK 3.4	SK 3.4	107	48	9	U字	方形	A		1 b
SK 3.6	SK 3.6	98	78	12	風	方形	A		1 b
SK 3.7	SK 3.7	100	10	10	U字	方形	A		1 b
SK 3.8	SK 3.8	288	107	14	U字	方形	A		1 e
SK 3.9	SK 3.9	109	67	7	風	方形	A		1 b
SK 4.0	SK 4.0	94	73	6	風	方形	A		1 b
SK 4.2	SK 4.2	126	16	16	U字	方形	A		1 c
SK 4.3	SK 4.3	97	18	18	U字	方形	A		1 a
SK 4.4	SK 4.4	144	125	12	U字	方形	A		1 c
SK 5.0	SK 5.0	97	87	27	風	方形	A		1 b
SK 5.1	SK 5.1	89	82	47	風	方形	A		1 b
SK 5.2	SK 5.2	150	110	24	風	方形	A		1 c
SK 5.3	SK 5.3	194	90	34	風	方形	A		1 c
SK 5.4	SK 5.4	75	75	41	風	方形	A		1 b
SK 5.5	SK 5.5	370	175	67	風	方形	A		1 f
SK 5.8	SK 5.8	178	72	66	風	方形	A		1 c
SK 5.9	SK 5.9	161	122	8	風	方形	A		1 c
SK 6.0	SK 6.0	328	67	18	U字	方形	A		1 a
SK 6.1	SK 6.1	56	53	28	風	方形	A		1 e
SK 6.2	SK 6.2	52	52	20	風	方形	A		1 a
SK 6.3	SK 6.3	69	50	18	風	南門形	A		1 a
SK 6.4	SK 6.4	267	67	36	風	方形	A		1 a
SK 6.5	SK 6.5	49	10	10	U字	方形	A		1 e
SK 6.6	SK 6.6	295	183	31	風	方形	A		1 e
SK 6.7	SK 6.7	284	135	39	風	方形	A		1 e
SK 6.8	SK 6.8	233	103	27	風	方形	A		1 d
SK 6.9	SK 6.9	400	180	28	風	方形	A		1 f
SK 7.0	SK 7.0	306	152	29	風	方形	A		1 f
SK 7.1	SK 7.1	305	200	44	風	方形	A		1 e
SK 7.2	SK 7.2			47	風	方形	A		
SK 7.3	SK 7.3		174	46	風	方形	A		
SK 7.4	SK 7.4	221	142	15	U字	方形	A		1 d
SK 7.5	SK 7.5		150	60	風	方形	A		
SK 8.0	SK 8.0		190	67	U字	方形	B		
SK 8.2	SK 8.2	400	240	43	U字	方形	B		1 f
SK 8.3	SK 8.3			40	U字	方形	B		
SK 8.4	SK 8.4		80	40	U字	方形	B		

火葬施設

遺構番号	登録番号	長	短	深	断面	平面形	状	備考	分類
SK 0.1	SK 0.3	91	61	26	U字	方形	A	骨片・炭化物・灰土	1 a
SK 1.1	SK 1.1	75	48	22	U字	方形	A	骨片・炭化物・灰土	1 a
SK 0.3	SK 1.2	90	53	19	U字	方形	A	骨片・炭化物・灰土	1 a
SK 0.4	SK 4.9	55	13	U字	南門形	A	骨片・炭化物・灰土	1 a	
SK 0.5	SK 7.9	52	35	U字	南門形	A	骨片・炭化物・灰土	1 a	

溝

遺構番号	登録番号	長	短	深	断面	平面形	状	備考	分類
SD 0.1	SD 0.1	147	46	—	—	—	A		
SD 0.2	SD 0.2	100	29	U字	—	—	A	断面照片	
SD 1.3	SD 0.3	377	66	19	U字	—	A		
SD 0.4	SD 0.4	68	12	U字	—	—	A		
SD 0.5	SD 0.5	54	8	U字	—	—	A		
SD 0.6	SD 0.6	54	17	U字	—	—	A		
SD 0.7	SD 0.7	48	16	U字	—	—	A		
SD 0.8	SD 0.8	69	12	U字	—	—	A		
SD 0.9	SD 0.9	44	15	U字	—	—	A	上字に屈曲	
SD 1.0	SD 1.0	37	20	—	—	—	A		
SD 1.1	SD 1.1	42	10	V字	—	—	A		
SD 1.2	SD 1.2	75	21	U字	—	—	A		
SD 1.3	SD 1.3	75	21	U字	—	—	A		

井戸

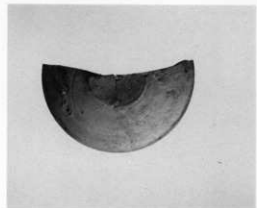
遺構番号	登録番号	長	短	深	断面	平面形	状	備考	分類
SK 0.1	SK 1.0		204	180	風	隅方形	A	土上・野埋積	
SK 0.2	SK 3.5		150	67	風	隅方形	A	井上・野埋積	
SK 0.3	SK 4.8	220	180	155	風	隅方形	A		

〈挿入掲載遺物一覽〉

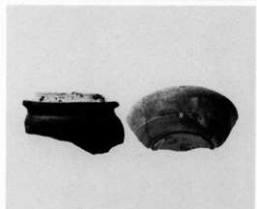
挿入番号	登録番号	分類	口径cm	器高cm	口径cm	出土遺構
1	SK-30	土師皿	(8.0)	1.3	(5.4)	SK 1.1
2	SK-31	土師皿	(8.2)	1.3	(5.2)	SK 1.1
3	SK-32	土師皿	(5.0)			SK 1.1
4	SK-24	施釉壺		6.9		SK 0.4
5	SK-4	灰輪系土師	8.5	0.9	6.0	SK 4.7
6	SK-35	施釉鉢	(19.0)			SK 3.7
7	SK-41	施釉鉢	(21.6)			SK 4.6
8	SK-42	施釉鉢	(16.4)			SK 4.6
9	SK-5	施釉鉢	(25.9)			SK 0.1
10	SK-18	土鍋	(16.7)			SK 0.1
11	SK-6	土鍋	(17.6)			SK 0.1
12	SK-7	土鍋	(19.7)			SK 0.1
13	SK-22	土鍋	(19.6)			SK 0.1
14	SK-21	土鍋	(21.2)			SK 0.1
15	SK-2	灰輪系土師	(12.0)			SK 0.1
16	SK-3	灰輪系土師	(12.2)			SK 0.1
17	SK-10	灰輪系土師	(18.8)			SK 0.1
18	SK-19	灰輪系土師		(3.8)		SK 0.1
19	SK-4	灰輪系土師	(12.4)			SK 0.1
20	SK-16	灰輪系土師	(12.0)	2.9	3.9	SK 0.1
21	SK-14	灰輪系土師			4.3	SK 0.1
22	SK-15	灰輪系土師	(13.0)			SK 0.1
23	SK-12	灰輪系土師	(8.0)	0.9	(6.4)	SK 0.1
24	SK-11	灰輪系土師	(8.4)	1.2	(4.8)	SK 0.1
25	SK-17	灰輪系土師	(8.4)			SK 0.1
26	SK-20	灰輪系土師			(4.4)	SK 0.1
27	SK-13	土師皿	(7.8)	1.1	(6.2)	SK 0.1
28	SK-23	施釉鉢	10.0	3.3	5.7	SK 0.1
29	SK-9	施釉鉢	(9.8)	3.3	(5.3)	SK 0.1
30	SK-1	灰輪系土師			11.0	SK 0.1
31	SK-44	施釉鉢	(15.0)	(8.5)		SK 4.8
32	SK-45	灰輪系土師	(14.8)			SK 4.8
33	SK-51	灰輪系土師	(12.0)	3.5	(3.8)	SK 4.8
34	SK-49	灰輪系土師	(11.7)			SK 4.8
35	SK-50	灰輪系土師	(12.0)			SK 4.8
36	SK-53	灰輪系土師	(8.2)	1.0	(4.3)	SK 4.8
37	SK-47	灰輪系土師	(8.0)	1.0	(6.0)	SK 4.8
38	SK-52	灰輪系土師	(8.0)	1.2	(4.8)	SK 4.8
39	SK-48	灰輪系土師	(9.2)	1.4	(4.6)	SK 4.8
40	SK-46	施釉壺			7.2	SK 4.8
41	SK-28	施釉鉢	(23.4)			SE 0.1
42	SK-29	施釉鉢			(12.2)	SE 0.1
43	SK-27	灰輪系土師	(12.2)			SE 0.1
44	SK-26	灰輪系土師	(7.2)	1.1	(4.6)	SE 0.1
45	SK-25	青磁鉢	(14.0)			SE 0.1
46	SK-56	灰輪系土師	(13.2)	3.4	(4.6)	SD 0.8
47	SK-37	灰輪系土師	12.9	4.6	4.7	SD 0.8
48	SK-38	灰輪系土師	(15.0)			SD 0.8
49	SK-57	施釉鉢	(10.6)	2.9	(4.2)	SD 0.8
50	SK-54	灰輪系土師	(8.4)	1.2	(5.0)	SD 0.8
51	SK-55	灰輪系土師	8.0	1.3	5.1	SD 0.8
52	SK-39	灰輪系土師			3.5	SD 0.8
53	SK-58	天目鍋	(15.4)			SD 0.8
54	SK-40	青磁鉢			(5.8)	SD 0.8
55	SK-59	灰輪系土師	(13.6)	3.6	(5.0)	SD 0.9
56	SK-60	灰輪系土師	(11.0)	4.0	(3.6)	SD 0.9
57	SK-61	灰輪系土師	(13.0)			SD 0.9
58	SK-62	灰輪系土師	(14.0)			SD 0.9
59	SK-66	灰輪系土師	(11.8)			SD 1.3
60	SK-63	施釉鉢	(26.0)			SD 0.9
61	SK-64	施釉鉢	(31.4)			SD 0.9
62	SK-67	施釉鉢	(26.0)			SD 1.3
63	SK-65	土鍋	(22.2)			SD 0.9
64	SK-1	砥石				

图 版

74



10-29



14



28



4





91A区 全景



91A区 (東から)

91A区西側(東から)



左: SK58断面(東から)
右: 91B区(西から)

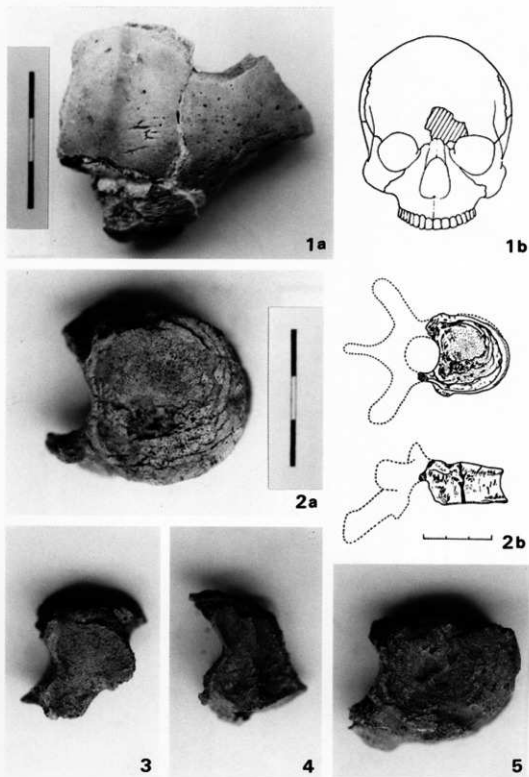


91A区東側(東から)



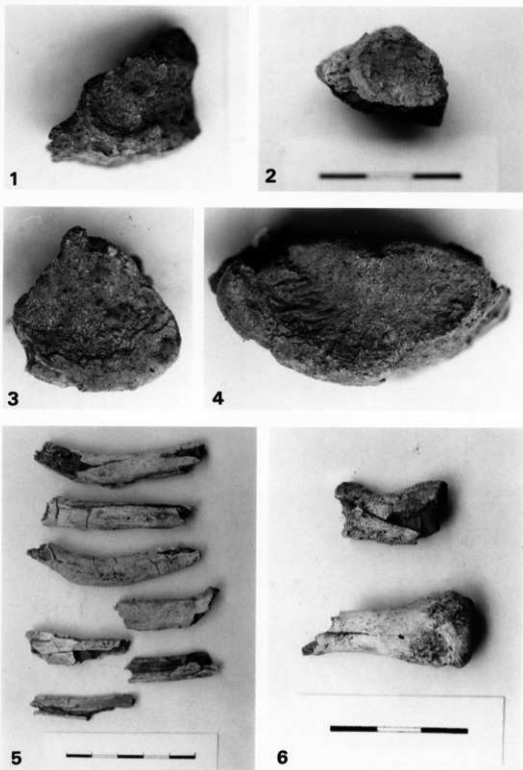
左: SX03(東から)
右: SX02(東から)





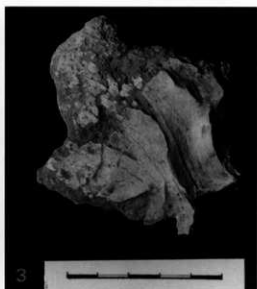
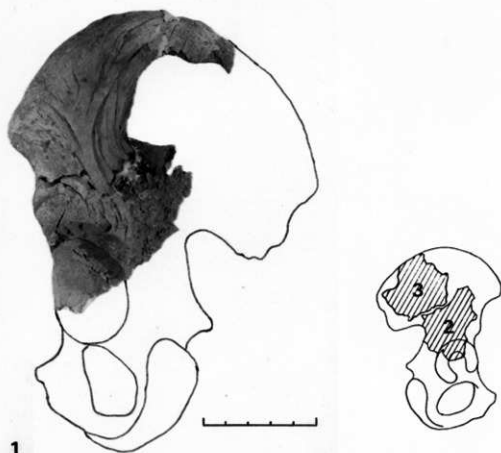
SX02出土人骨 (3-5は同縮尺)

1a.b 前頭骨 2a 第10胸椎、椎体上面 2b 第10胸椎(上:上面、下:右側面)
 3 第7胸椎、椎体上面 4 第8胸椎、椎体上面 5 第9胸椎、椎体上面



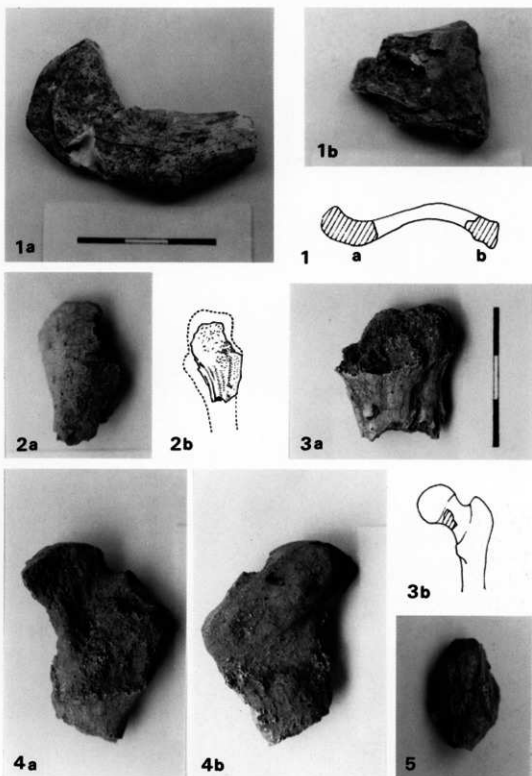
SX02出土人骨

- 1 第11胸椎、椎体上面 2 第1腰椎、椎体上面 3 第4腰椎(推定)椎体上面
 4 第5腰椎(推定)椎体上面 5 肋骨 6 上:手の第1基節骨、下:第1中手骨



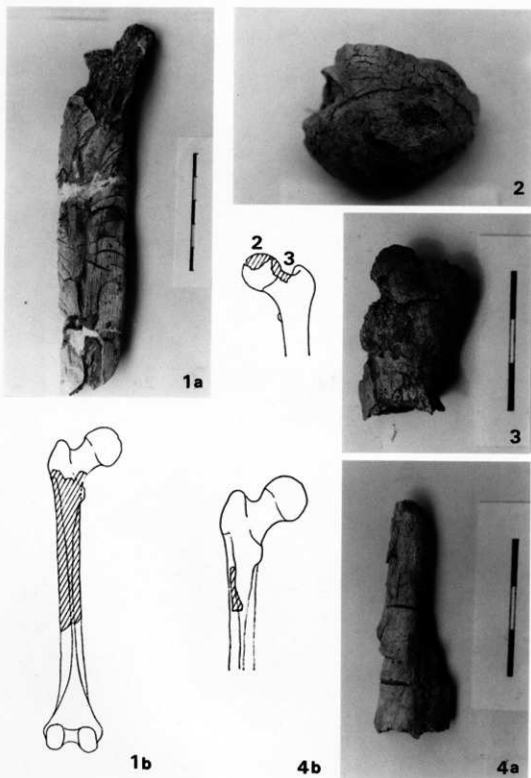
SX02出土人骨

1 左寛骨、脇骨前半部 2 右寛骨、脇骨下部 3 右寛骨、脇骨裏後部



SX02出土人骨 (1-5は同縮尺)

1a 右鎖骨、肩峰端下面 1b 右鎖骨、胸骨端下面 2a.b 右尺骨、肘頭
 3.a.b 右大腿骨、頸部内面 4.a.b 大腿骨、左右不明 5 左腓骨、腓骨頭

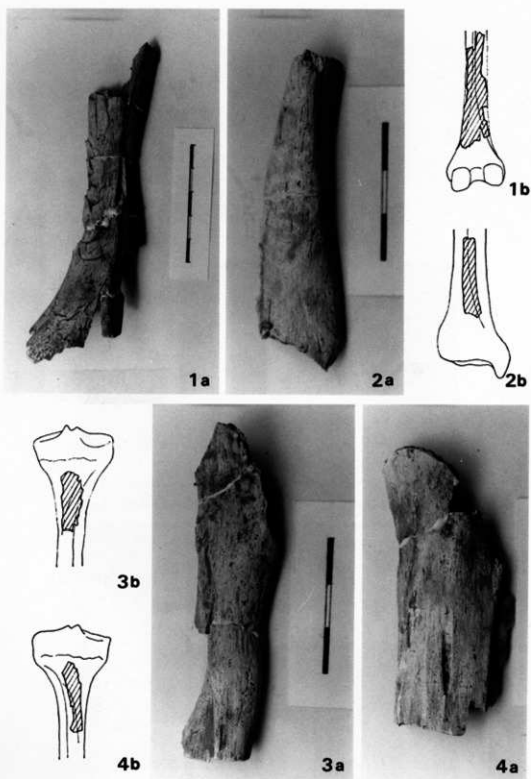


SX02出土人骨(2-3は同縮尺)

1a.b 左大腿骨、体上半部(a,bで上端の形が異なるのは、骨片の変形で接合できないためである)

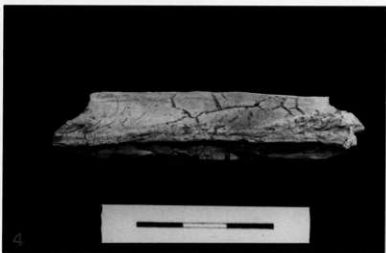
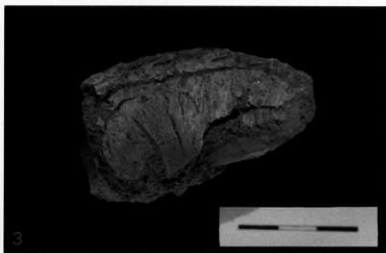
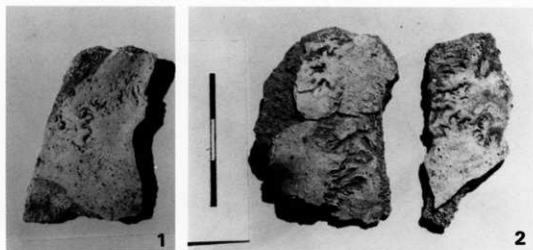
2 左大腿骨、大腿骨頭 3 左大腿骨、大腿骨頭(2,3は同じ骨かどうか不明、重複しないことを示す)

4a.b 左大腿骨、上部後面1と重複



SX02出土人骨

1 a. b 右大腿骨、下部後面 2 a. b 右脛骨、下部後面
 3 a. b 左脛骨、上部後面 4 a. b 右脛骨、上部後面



SX03出土人骨

- 1 左ラムダ縫合 2 ラムダ縫合(推定) 3 左寛骨、腸骨翼前部
4 右大腸骨、上部後面

報告書抄録

フリガナ	アトノクチ・イッシキナガハタ・フナバシミヤウラ
書名	跡ノ口遺跡・一色長畑遺跡・船橋宮裏遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第51集
編著者名	石黒立人・服部俊之・宮腰健司・赤塚次郎・堀木真美子・吉岡郁夫
編集機関	財団法人愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498 愛知県海部郡弥富町大字前々須新田字野方802-24
発行年	西暦1994年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
アトノクチ 跡ノ口	伊勢市イッシキミヤ ウラ 船橋市一色森 山町	23220	09169	35°14'02"	136°45'15"	19910416 19910831	2560	道路建設
イッシキナガ 一色長畑	伊勢市イッシキナガ ハタ 船橋市一色長 畑町	23220	09168	35°14'02"	136°45'25"	19910620 19910810	880	道路建設
フナバシミヤ 船橋宮裏	伊勢市フナバシミヤ ウラ 船橋市船橋町 花の木・宮浦・ 市場	23220	09134	35°14'40"	136°46'50"	19911101 19920131	1600	道路建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特 記 事 項
跡ノ口	集落	弥生 平安 中世	土坑・溝 溝	弥生土器 須恵器 灰釉系陶器	洪水の影響 牛下顎骨
一色長畑	集落	弥生	竪穴建物 土坑	弥生土器 磨製石斧 石鏃	焼失建物1
船橋宮裏	墓域	古墳 室町	土坑 火葬施設 井戸 溝	灰釉系陶器 古瀬戸	火葬施設5

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第51集

跡ノ口遺跡

一色長畑遺跡

船橋宮裏遺跡

1994年3月31日

編集・発行 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

印刷 株式会社 正鶴堂